



すくらんぶる
交差点

阿門 遊

一 独立宣言？

「独立？」

「そう、独立だ」

「何から？」

「このT市から。このK県から。この日本から」

「何のこっちゃ」

二 T市駅前の様子

午前八時。JR T駅に電車が到着。次々と乗客が押し出される。通勤、通学のサラリーマンやOL、学生たちは改札口に流れる。我先に行こうとするが、そこに意思があるのかどうかかわからない。ただ、毎日の繰り返し、ところてんが押し出される風景だ。駅の構内を出るとそこは広場。信号は赤。みんな立ち止る。会社や学校は、横断歩道を渡った先だ。広場にはバスターミナルが併設されている。

いつもよりも、いや、いつものように一分から二分遅れてバスが到着。市内のあちらこちらから何台ものバスが、この駅に向かう。バスのブレーキ音、ドアが開く音がするたびに、乗客はバスを降り、広場へと向かう。駅の近くは港だ。フェリーや旅客船のターミナルがある。

そこからも汽笛が鳴るたびに、人が押し寄せてくる。海の波はおだやかだが、人の波は騒がしい。船が到着する際に起きた波に乗ったまま、人が押し寄せてくる。その勢いも信号の赤で止まる。横断歩道の反対側には私鉄の駅がある。

JRやバス、船に乗り、会社や学校に行く人々たちが降りてきた。広場の地下には駐車場と駐輪場がある。自宅から自動車や自転車で通勤してきた人が、駐輪場や駐車場に地下に吸い込まれ、再び、湧き出てくる。東西南北、上下左右、スクランブル交差点を取り囲むようにして、人々が信号の色が変わるのを目の色を変えて待っている。

交差点の中では、バスや自家用車、タクシーなどがひしめきあうように走り回っている。車間距離はほとんどない。車一台どころか、タイヤ一個分も開いていない。数珠つなぎのように、回転寿司のカウンターに乗った皿のように、金魚のフンのように（一体、どの比喻が適当なんだ）、とにかく、ごちゃごちゃしている。（うーん、擬態語で逃げたか）

「昨日も元気、今日も元気、明日も元気。元気だから病院に行こう」

自分でもお気に入りの歌をうたいながら、さっそうと電動三輪車に乗りこむ明治正江。御年七七歳。夫は十年前に亡くなり、息子も娘も独立して、家にはいない。一人生活が長く続く。多分、このまま続くだろう。正江の唯一の楽しみが、愛用の電動三輪車に乗り込み、外出することだ。特に、病院がお気に入りだ。病院に行けば、必ず人に会えるから。待合室は、いつも満員御礼。同年齢のじじいやばばあ、がいる。

しわくちやの顔や手足、曲がった背中を見ると、自分が鏡を見ているようで辛いけれど、話し掛けるネタはふんだんにある。道端やスーパー、銀行などで見知らぬ人に声を掛ければ、うっとおしがられたり、怪しがられたり、はてまた、警察に通報されたりするが、ここ、病院なら大丈夫。みんな、診察まで時間を持て余している。特に、単科の診療所じゃなく、内科から始まり、外科、整形外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科などがある総合病院がいい。

ソファに座る隣のばあさんに「どこが悪いんですか」と心配した振りをして声を掛ければ、「ええ、ちょっと、腰が痛いんですよ」と必ず答えてくれる。「実は、わたしも腰が痛いんですよ」と話を合わせれば、そこからは、無尽蔵に話題が付きない。

この歳だ。眼はかすむし、耳はよく聞こえない。歯は入れ歯で、足腰は痛い。頭は忘れっぽいし、胃はむかむかする。そう言えば、最近、尿漏れもある。以前は、出掛ける際は必ずトイレを済ませ、出掛けた先でも必ずトイレに入ったものだが、最近は、我慢することなく、尿が漏れてしまう、はたして、これはいい事なのだろうか？いい事じゃない。それは、いいとして、自分の病気のことをひとつしゃべれば、何倍にもなって返ってくる。

マイナスの話題ばかりでいやだって？そんなことはない。人間は、我慢すると人は離れていくが、不幸であることを嘆くと、自分はこの人よりもまだ、こいつを出汁にして力強く生きていける、と思い、不幸な人に近づいていくのだ。マイナスを吐き出すことで、体の中がプラスになるのかも知れない。いや、自分の体がマイナスだからこそ、プラス思考の人が寄って来るんだ。なんだ、あたしは磁石ばばあ、か。

でも、毎日、同じ内容のことは話せないんじゃないかだって？心配してくれてありがとう。その点は、大丈夫。お互い、頭の中はからんからん音がするぐらい、脳が萎縮を始め、認知が始まってきている。おかげで、昨日会ったかどうかは忘れて、昨日話したことも覚えていない。年をとることは素敵なことだ。さあ、今日も、友だちを作り、病院に行くぞ。

「昨日も元気、今日も元気、明日も元気。元気だから病院に行こう」

明治正江は、自作の歌詞と自作のメロディで、鼻歌まじりに電動三輪車のスタートボタンを押した。車は静かに動き出す。十分も走っただろうか。交差点に到着。病院に行くのは楽しいことだが、問題はここだ。駅前のスクランブル交差点。JRと私鉄とバスとフェリーの結節点のため、乗降客で込み合う。向こう側に渡らなければ病院に行けない。一方通行ならばスムーズに渡れるが、反対方向や斜め方向からも人が押し寄せてくる。また、こちらからも人が動く、この流れに乗らないと前に進めない。途中で方向を変えようとしても、周りは人だらけ。勝手に方向は変

えられない。まして、反対方向から押し寄せてくる人波に出会いうと、三輪車が転倒してしまいそうだ。

もう少し、時間をずらせばいいのだが、そうなれば、診察の待ち時間が長くなる。正江としては、自分の診察が終わり、余裕の気持ちで、人に話し掛けたい。そのためには、診療時間が始まる三十分前には受付を済ませ、ゆったりとした時間を過ごしたい。だからこそ、わざわざ朝一番で、病院に通うのだ。あの、白い壁の象牙の塔が見える。目的地はあそこだ。

信号が点滅しだした。幹江は、レバーを前に倒し、スピードを上げようとする。誰かの体が車の左側に当たった。車が右に向く。あれ、違う。正江は方向を左に戻そうとするが、再び、誰かの体が当たる。「ごめんなさい」の言葉もない。みんな、あせっているのだ。正江もあせる。

だが、さっきの衝撃で、車は進行方向に向かって東に向いた。さらに、かじをとり直す幹江。今度は、斜めからの体当たり。電気自動車は南に向く。これじゃあ、やって来た方向だ。このまま自宅送りか。そう言う訳にはいかない。正面から人の群れ。再び、体当たり。今度は、西方向。再び、体当たり。ようやく、進行方向に戻れた。あたしはビリヤードの玉か。あっという間に一回転。と、間もなく信号は赤。

正江は完全に取り残された。激しく鳴るクラクション。周囲は人から車に入れ替わった。どうすることもなく行き場を失い、「あーれ」の叫び声とともに、交差点の真ん中で回り続ける正江であった。

三の二 平成 昭 の場合

あーあ。今日も終わった。平成昭は、体に溜まった疲れを服ごと全て脱ぎ去りたかった。肩から、背中から、腰から、空全体の重力が自分にだけ押し掛かっているようだった。徹夜の仕事は警備。昨晚から今朝の朝まで。水道管の工事だ。ここ二～三日、同じ現場にいる。

「ええ、またですか」

「頼むよ、平成」

「ここ二週間、ずっと徹夜の仕事ですよ」

「うちも、若い奴がいなくてな。年寄りじゃあ、仕事にならない。それに、相手先からも、お前を頼むと指名がきているんだ。警備がおろそかで、事故を起こしたら、大変だからな。その点、お前なら大丈夫。でも、どうしても、いやなら、他の奴に頼むぞ。もう、仕事は回ってこないかもしれないけどなぞ」

部長がほめたと思ったら、すぐに脅した。この警備業界も、公共工事が減ったせいで、仕事が激減している。まだ、二十代なので、仕事を優先的に回してもらえるが、先輩の五十歳代の方は、仕事をあてがわれなく、連絡待ちの状況だ。連絡待ちだと言っても、一週間に一回も連絡が来ないことがある。それじゃあ、おまんまが喰えない。会社の寮に住んでいるが、食費や光熱水費も請求されるので、借金が膨らむ一方だ。会社からは抜け出せず、雪だるま式に増え続ける負債。

そんな先輩を見ているので、昭としては、辛く、厳しい仕事でも、会社の命令に従わざるを得ない。だからといって、自分の未来に展望が開けている訳ではない。目の前の仕事をこなすだけ。明日の仕事の保証はない。このままでいいのか、という思いが、常に頭の中をよぎる。ついでに、体が交差点をよぎる所まで来た。疲れ果てた自分の隣には、これから一日の仕事を始めようとしている人が立っている。目に力がある。

それに比べて自分は、死んだ魚の眼。瞼が半分以上降りてきて、まともに眼が開けられない。歩き方だって違う。購入時は白いジョギングシューズだったが、今は埃にまみれた灰色で、足をするように歩く自分。他方、磨かれて、光沢を帯びた革靴。踵が跳ねあげられ、大地を蹴っている。ふーう。ため息だ。

もうすぐ信号が変わる。こうした生气あふれる人の中に、自分が入って行くのは疲れる。特に、スクランブル交差点は、人、ひと、人、ひと、人、で溢れかえっている。自分の隣だけではない。自分が渡る反対側にも、人、ひと、人、ひと、人、だ。左斜め前も、右斜め前も、人、ひと、人、ひと、人、だ。本当に、向こう岸まで渡りきれののだろうか。途中で、倒れてしまいそうな気がする。

信号が点滅しだした。周りの人の眼が輝く。青だ。ダッシュ。だが、すり足では、スピードが出ない。次々と追い抜かれていく。追い抜かれるだけならまだ。投げ捨てられた空き缶やたばこの箱のように、後ろから押されたり、蹴飛ばされたりする。俺は何も悪いことしていないぞ。ただ、疲れて、足が前に進めないだけだ。

すり足がひっかかった。わずか数ミリのマンホールの蓋だ。そこに後ろからの重圧。見事に前

につんのめった。後は押して知るべし。汚れたガードマンの制服だが、横断歩道の横縞じゃないはずなのに、平気で人が踏んでいく。人が通り過ぎて、やっと立ち上がろうとすると、信号は点滅状態。

こうして、平成昭は交差点の真ん中で取り残された。

急がないと。急がないと。口癖化した言葉。時間に遅れる。時間に遅れる。心がどんどん締め付けられる。早く変われ、この信号め。山川陸美二十三歳。こども二人、五歳の女の子と三歳の男の子。夫はいない。三年前に離婚。母子家庭だ。

子どもは近所の母親に預け、保育所に連れて行ってもらう。自分は、朝から晩まで仕事だ。午前中はコンビニの店員。夕方からは居酒屋で働く。1日二回職場が変わる。仕事が終わるのは午後九時頃。実家に帰り、夕食を食べ、子どもを連れて家に帰る。こんな生活が何年も続いている。夫とは、中学を卒業後、プータローしていた時の遊び仲間だ。いわゆるできちゃった婚。相手も同じ年齢。

当初はうまくやっていたが、夫は働かず、陸美が働いた金を使うようになる。注意すると怒りだし、あげくに果てには、手を挙げ、足で蹴る。いわゆるDVだ。三年間の長いようで短い結婚生活を区切り、離婚。

子どもは陸美が引き取った。体だけが大人で精神年齢がガキの夫に、子どもを任すわけにはいかない。自分もちやらちやらした生活を送っていたが、夫よりもましだと思う。その夫が今、どこにいるのか知らない。以前、このT市のショッピングセンターで見かけたけれど、女と一緒にだった。もう、未練はない。かえって、せいせいした気持ちだ。なんで、あんな奴と結婚したんだろうと、自分が不思議で仕方がない。

陸美の母も母子家庭だった。父親は、陸美が物心ついたときにはいなかった。以前、母親に聞いたけれど、詳しくは教えてくれなかった。どうせ、自分と同じようなものだろう。その反動か、結婚生活、父親に対する、男に対する憧れが強かったのかもしれない。

その夢が、叶うとともに、もろくも電光石火のように崩れた。所詮、夢を抱いた方が悪いのだ。今は、子どもを育てることが先決だ。そのためにも、目の前の信号が変わり、商店街にあるコンビニに飛び込まなければならない。隣を見る。自分と同じように出勤を急ぐサラリーマンやOLたちがいる。一步でも先に飛び出さないと。よく見みると自分と同じ年頃だ。

片や、離婚で、子どもがいて、朝から晩まで働いている。片や、一流企業のオフィスで、九時から十八時まで働き、アフターは、お茶やお花を習い、週に一回は、フィットネスクラブ、会社の同僚との飲み会、など、など。自分と、全く異なる人生。いや、想像することもできない。もし、変われるものならば、この服を取り換えて、人生までも、取り替えて欲しいと思う。そんな考えもすぐかき消えた。

信号が青になった。うざく、うっとおしい店長だけど、お金のため、子どものため、そしてわかんないけれど、この流されていく自分のために、コンビニに行かないと。あっ。急ぐあまり、ハイヒールが脱げた。「だから、ハイヒールなんて、履かなければいいのに」。母親の顔が思い浮かぶ。

でも、いくら、子持ちでも、離婚していても、コンビニで働こうが、居酒屋で働こうが、ハイヒールは履きたい。いや、同じ年齢の女性より劣っていたり、見栄えが悪いなんて、自尊心（そんなものがあつたかどうか知らないけれど）が許さないのだ。ハイヒールは、あたしが生きて

いく上での支えなのだ。自分がダメなんだと自覚しているからこそ、いつも他人から見下されていると感じてしまい、つい、どうでもいいことでも気になってしまう。

自分が劣っていることを認めたくないばかりに、あんたとあたし、どれだけ違うんだ、と口に出してしまう。もちろん、相手は、あたしのことなんか、構ってくれない。相手にもしてくれない。うすら笑いするだけだ。それでも、必死に、その笑いの幻影に向かおうとする。

急いで！心の中の自分が叫ぶ。脱げたハイヒールを履こうとする。痛い。誰かに足を踏まれた。完全に脱げたハイヒール。ない。スクランブル交差点では、多くの人が行き交う。なんとかの
大行進じゃないけれど、主人であるあたしを置いてきぼりにして、右のハイヒールだけが、交差点を渡ろうとする。

待って！人の脚の間を見るが、靴は見えない。片足だけじゃ、店には行けない。靴はあたしの宝物。信号が点滅している。急がなくっちゃ。あつた！ほとんどの人が交差点を渡りきり、空白地帯の真ん中に靴がポツンと取り残されている。走る。睦美がハイヒールを履き直した時には、完全に交差点の真ん中で取り残されていた。

三の四 瀬戸内 潮雄 の場合

瀬戸内 潮雄。御年四十二歳。保険会社の営業マンだ。役職は課長。名前は課長だが、部下はいない。営業先の信用を得るために、年をとればみんな課長になれる、いわゆる、課長担当だ。上司は支店長。朝から晩まで顧客を回り、頭を下げ、笑顔を絶やさず、元気に振舞い、営業成績に繋がらなくても、「ありがとうございました」と声を出す。

地元の大学を卒業し、ずっと、この仕事を続けている。大学時代は、サークルの劇団に加入して、年一回の公演に熱中していた。将来は、役者とまではいかななくても、演劇関係の仕事に就きたいと思っていたが、アルバイトでやっていた舞台関係の裏方の仕事は体力的にきつく、若いうちならともかく、歳をとっても続けられるかどうか不安を感じた。とてもじゃないが、このT市で、演劇関係で喰っていくのは難しい、どこかに就職して、好きな演劇をアマチュアでできないかと考えていた。

たまたま、採用されたのがこの保険会社だ。当然、演劇の「えの」字とも関係がない。就職した当初は、それでも、大学時代の仲間や後輩たちと、演劇集団を作り、年一回程度は公演していたが、みんな仕事が忙しくなり、年に一回の飲み会で会うことさえも困難になり、年賀状の行き来すら途絶えた。

保険の仕事に、天職という思いもなく、かと言って、転職する勇気もなく、だらだらと、いや、その場では一生懸命に、しかし、遠い目標はなくやってきた。いつかは自分のやりたいことをやってやろう、雌伏雄飛だと辞書で覚えた四字熟語は頭から消え去り、体は腹が突き出し、体重は九十キロを超え、転がることはできても、とてもじゃながないが、飛び上がることはできない。

頭は夕日に近づいてきた。自分では、朝日のつもりだが、生まれたての赤ちゃんのように毛が生えてくる勢いはなく、落ちていく一方だ。そうだ。人は朝日のような頭で生まれ、やがて年をとり疲れはてると、夕日のような頭になるのだ。そして、その夕日も、いつまでも輝くことなく、お隠れになるのだ。切ない、実に、切ない。いいや、髪の毛との別れのことじゃない。

俺は、一体どうなるんだと呟きながら、「瀬戸内君」と支店長に呼ばれれば、今までの思いがどこかに飛んでいき、「はい」と二つ返事で、支店長室の中に入って行く。そんな、自分が、い・や・だ。かといって、仕事はやめられない。

十年前に結婚し、子どもが二人。妻はパートで、家の近くのスーパーで働いている。昨年、建売住宅だが、自分の家を購入し、今は、ローン生活まみれだ。三十年の長期返済計画には、当然、退職までの収入と退職金が組み込まれている。

家のローンという鎖、ロープにつながれた自分。自由があるようで、自由はない。唯一、会社から解放される昼休みも、弁当持参だ。スーパーの総菜コーナーの前日の半額の売れ残りをおかずにして、弁当を腹に収める。食後のコーヒーだなんて、もったいない。缶コーヒーが関の山だ。タバコはもちろんやめた。楽しみといえば、家に帰ってからの、一本百円の第三種のビールを二本飲むことだ。

しかし、最近、夏が近づき暑くなってきたせいか、もう一本欲しくなる。缶ビールをグラスに

注いだ後、二本飲みきった後で、一滴でも残っていないかと、缶をひっくり返す。缶を振る。一滴落ちてきた。神のしずくだ。瀬戸内の眼からも一粒の涙。

ああ、この至福の時よ。そうか、自分は、「しふく」という言葉好きなんだ。だから、会社から帰ってきたら、それまで、共に八時間以上過ごした、背広やネクタイ、シャツを、仇のように脱ぎ棄て、本来の自分に戻ったかのように「私服」に着替えたり、つまらないエピソードで小説の「紙幅」を増やす作家の小説を愛読したりする、「しふく」が好きなんだ。

だが、昨日は、違っていた。久しぶり、本当に久しぶりに、昔の演劇仲間に出会った。互いに、ドーランを塗っていたわけでもなく、かつらをかぶっていたわけでもなく、方言じゃなく、都会のNHK的なしゃべりをしていただけでもなく、「あいうえおあお」と発声練習をしていたわけでもないで、駅前出会った時には、お互いに誰かがわからなかった。

偶然の偶然、バスを待っていた時に、前田、そう、昔の仲間の前田が、自分の前に並んでいた。前だ。まるで、冗談だ。最初は、本当に気がつかなかったが、前に並ばれた「まえだ」と言った瞬間、前の前田が後ろを振り返り、瀬戸内の顔をじっと見つめる。何の因縁だ。瀬戸内もじっと見つめる。

目と目があった。その時だ。瀬戸内が「久しぶり」と声を掛けた。だが、この時点では、知り合いだとはわかっていても、名前までは思い出せなかった。よくあることだ。「えっ、お前、瀬戸内か」先に、相手が自分の名前を呼ぶ。この時点でも、まだ、名前が浮かばない。こちらから先に声を掛けながら、「あなたのお名前、なんってんの？」なんて、ギャグは言えない。とりあえず、名前を呼ばずに、適当にごまかしながら会話を続ける。

「ほんと、なつかしいなあ」

「ああ、なつかしいよ」

「元気か？」

「元気だよ」

その後は、駅前のサラリーマン向けの居酒屋へ入る。「何名様ですか？」店の女の子が聞いてくる。ガッツポーズじゃなく、ブイサインで、二名と軽く返事。久しぶりのビールだ。そう、家では、盆、正月でないといとビールなんて飲めやしない。ほとんどが、第三のビールだ。それも、毎日のように、スーパーの広告を見て、一番の底値の時に、買いだめをする。

うまくいけば、三百五十ミリリットルの缶が、一本百円で飲める。だが、その安さがあだになる。一本百円だということで、二本でも二百円、三本でも三百円だ。そう、計算は合っている。まだ酔っていない証拠だ、もっと飲めるぞと、つい、気が緩み、財布も緩み、飲み過ぎてしまうのだ。

話を戻す。農家の人は、麦の成長と豊作を期し、麦踏みをしたというのが、もし、年四回でも、麦百パーセントのビールが飲めるとしたら、いくらでも麦踏みをするぞ、プラカードをあげたいくらいだ。瀬戸内は、今年二回目のビールを名前不肖の友人と一緒に飲み続けた。

互いの境遇を、互いの傷をビールの泡と水分でほぐしながら、1時間が二時間、二時間が三時間、三時間が四時間と過ぎていく。それにつれて、過去が、一年、二年、三年、四年、ああ卒業だ、と思い出される。店を出た後も、近くのコンビニで、ここからは予算の関係で、普段飲み慣れ

ている第三のビールに戻ったが、互いの状況を酒のあてにして、駅前の広場で飲み続けた。どれほど、飲んだかはわからなくなった。それだけ飲んだのだ。

が、暑さを感じて瀬戸内は目が覚めた。朝の光だ。俺はどこにいるんだ。顔がちくちくする。少し、緑の匂い。瀬戸内は、植え込みの中で寝ていることに気がついた。海の上だったら、こんなに熟睡じゃなく、そのまま入水だ。

結果的に、昨晚、一緒に飲んだ奴は、名前を思い出せなかった。大学時代の友人であることは確かだ。それぐらい、物忘れがひどくなっている。自分としては、思いたせないものは、忘れたいから忘れたんだ、として、前向きの気持ちでいる。それはいいとして、今、何時だ。ポケットをまさぐる。携帯はある。ついでに、財布もある。少し、安心する。

時間は？七時三十分。いかん、いかん。入社時間だ。慌てて、植え込みから飛び出る。もうこの時間帯だと、通勤・通学客が徐々に増え出す。ピークは八時だ。八時にはここを出発しないと、会社に間に合わない。昨日のままの服装だが仕方がない。

せめて、顔ぐらいは洗わないといけないと思い、歯ブラシや歯磨き粉、下着を駅前のコンビニで購入する。袋ごとトイレに入り、着替えを済ます。なんやかんやで七時五十五分。楽しい時も、慌ただしい時も、時間は同じように進む。

さあ、準備万端、会社に出勤だ。スクランブル交差点は、人で溢れかえっている。この疲れた体のまま、酒臭い体のままで、通勤か。隣に立っているOLがいやそうに鼻をつまむ。つまみたいのは当事者の自分の方が先だ。それに、頭がガンガンする。

二日酔いだ。まっすぐに歩けない。みんな元気だ。俺は、もうだめだ。それでも、何とか交差点の真ん中まで来た。大きく息をする瀬戸内。空を見上げる。東の空の太陽は黄色い。もうダメだ。信号は点滅しだした。足は千鳥で、同じ場所をぐるぐると回っている。ズボンの左ポケットにある万歩計も何の役に立たない、当たり前か。

こうして、瀬戸内はスクランブル交差点に取り残された。

三の五 甲 乙丙 の場合

転がる。転がる。お金が転がる。待て、待て、俺のお金たちよ。ジュースやビールの空き缶を拾っているのは、もう何日も風呂に入らず、髪も髭も伸ばしほうだいの男。年齢は不詳。自分でさえも何歳だかはわからない。覚えていない。ただ、二十歳はとうの昔に通り過ぎた。もちろん、三十歳でもない。ひょっとしたら、四十歳でも、確実に、五十歳でもない。あるとしたら、六十歳以上であろう。どんな数え方や。

とにかく、住所不定、年齢不詳、性格不明のこの男にとって、唯一、他人が規定できる言葉は、職業：廃品回収業、たまに窃盗業であろう。二年前、後者の仕事をしくじったおかげで、お勤めして、先月、出所してきたところだ。現在は、前者の仕事に、今、集中している。

他人が他人をどんな奴なのか規定するのは、所詮、そんなものであり、規定する方も、その場の一瞬の感情や思考であり、規定される方も、取り立てて、そのことに不満はないというか、どうでもいいというか、知らない強みというか、まあ、そんなものである。人の口を瞬間接着剤でひっつけられないのと同様に、人の脳を電気ショックで止めてしまうようなものである。どんな、譬えや。

男は、今日の獲物、すなわち、朝飯または昼飯の種、上手くいけば、晩飯の種を求めて、転がる缶を追っている。缶は、当初、ビールの缶のように思われたが、長い間、転がったためか、苔むすどころか、表面の商品名部分が削れ、何の缶なのかわからなくなっている。

全く、自分と同じだ。缶を追い求める男はそう思った。時々、哲学的なこと、人生とはいかに生きるか、生きるべきなのか、日常に生活している時に（今まで潜在意識の中で考えていたことなのか、マグマ、おれは少し言い過ぎだ、誇張しすぎだ、それに、本当のマグマなんて見たことがない。

そう、例えば、マグマじゃなくて、ゲーセンにあるモグラ叩きの、モグラのように）ふと、顔を出すことがある。だが、それも、一瞬の出来事。いつまでも顔を出していれば、現実というハンマーに頭をいやというほど叩かれるから、様子窺いに顔を出し、眼を細めて外の世界を見るだけである。目の前の現実。

それは、缶を拾うこと。そして、その缶を金に換えること、その金で腹を満たすこと、つまらない人生に笑いや喜びをもたらす第三か、第四か、第五かのビールを購入すること。このためだけに、男は生きてきた。

説明が不足した。彼は、一人ではない。仲間がいた。犬だ。この駅前にも、何故か、犬の銅像がある。言われは知らない。戌年の日に、大きな災害があつて、その際に亡くなった人の慰霊碑なのか、それとも、災害時に、持ち前の鼻をいかして、人々の救助に尽力したものの、あと、倒壊寸前の最後の一人を救おうとして、ビルが崩れ、命を落とした救助犬なのか、ただ単に、犬好きの大金持ちが、自分の八十八歳を祝って建立したものか、定かではない。とにかく、この男は犬を飼っていた。いや、自分の生活さえもままならぬこの男に、犬など飼えるわけがない。犬と共同生活をしていると言った方がよい。

男は廃品回収等によって小銭が入れば、ビールとともに、犬の餌を購入した。犬の方は、コン

ビニで捨てられる賞味期限が過ぎた弁当を、犬好きの店員からもらって、この男まで運び、一緒に食べていた。いわば、戦場を共に生きる戦友のようなものだ。犬も、時には、この男と一緒にになって、転がる空き缶を啜えることもしていた。互いが互いを助け合う。なんて、いい関係だ。理想郷の人間と犬の関係。そう、太古以来、人と犬は友だちなんだ。作者の感想はいい。

さあ、そろそろ、この男の名前を明かそう。甲 乙丙（仮称）だ。何だ。そんな変な名前は、と思われるかもしれないが、先ほども説明したように、この男は自分の名前も年齢も覚えていない。そんな男だから、作者も、当然、この男のことは知らない。この男と呼ぶのも、表現上都合が悪いので、甲 乙丙と仮に名づけておこう。それじゃあ、犬の名前はだって？。犬も当然、自分の名前は知らない。自分からワンワンと吠えることはあっても、ワンワンが自分の名前ではない。この男が、コロと呼ぶと、この犬が尻尾を振って近づいてくるので、コロと名前を定義しよう。さあ、この甲 乙丙が、転がる缶を求めて、交差点にやってきた。

今日は、北から南に強い風が吹く。この広場は、港が近いことと、すぐ側にこのT市のシンボルタワーが建っているため、ビル風の影響もあり、強い時には、人が吹き飛ばされるほど、暴風が吹くこともある。雨の日など、傘を差していれば、傘は骨が折れ、ひっくり返ってしまう。傘が壊れるのを防ぐため、傘の根元近くを手で持っていれば、傘が風を受け、へたをすれば、人間傘ならぬ、人間傘になってしまう。

それはそれで、新たな海洋スポーツとして、T市の売りにしていけばいいのだが、通勤や通学、買い物のお客さんにとっては、折角、駅まで来たのに、また、家まで飛ばされれば、すごろくや人生ゲームのように、また、自宅から振りだした。ポケットからサイコロを転がす。サイの目が出た分だけ前に進む。三がでたら三步進み、マイナス二がでたら二歩後退だ。人生は、顔面、顎、ボディにパンチ・パンチ・パンチをくらって、なかなか前に進めないものなのだ。そんなことはいい。問題は、甲とコロのことだ。

今、信号は赤。交差点の中は、ラッシュアワー。バスやトラック、タクシー、営業車、レンタカー、通勤の自家用車が右に左に走っている。その中を、転がって行った空き缶が、車のタイヤに、右に左に、上に下に、跳ね飛ばされている。あっ。まるで、俺の人生だ。最近、年のせいか、よく、出来事を人生にたとえるようになった。

甲は過去を思い返す。田舎の中学を卒業後、蛍の光よりもネオンの光に吸い寄せられて、大都会へ行く。コンビニや警備、はてまた、風俗店の呼び込みなど、仕事を転々としたが、ネオンは自分を照らしてくれるものの、決して、自分が光輝かないことに気付き、北は北海道、南は沖縄、屋久島、まん中は、関ヶ原と、住み込みで、期間工やパチンコ店の店員として生活してきた。そこには意志はない。自分から流れたと言うよりも、流された感が強い。店がつぶれたり、顎になったり、派遣期間が切れたり、あっちこちではねられ続けて、今は、このT市にたまたま、ほんの偶然、いる。住んでいると言うよりも、うたかたの泡のように、漂っているだけだ。だから、強風に吹かれると、空き缶と同じように、飛ばされて転がるしか能がない。

だから、こうしてこのT市にいる。ポケットの中にはサイコロが二つ。ひとつは、自分。ひとつは、コロの分だ。転がす。転がす。サイコロをポケットの中で転がす。信号が変わった。さあ、ダッシュだ。目指すはコーラの空き缶二個。スチール缶だから、金にはならない。だが、ま

ずは、小銭からだ。これが終われば朝飯だ。朝飯前の運動だ。頭も心も澆刺だ。背中を曲げ、コロと同じ視線で、獲物を追う。通勤・通学客の脚の間から、缶を探す。あっちだ、コロ。ワンワン。コロも返答する。流れとは異なる。空き缶は、今は、車からサラリーマンやOLたちの脚に蹴られ続けている。全く、人生と変わらない。

甲 乙丙はOLの足元に転がった空き缶を掴んだ。その瞬間。

「キャー、何。この痴漢」OLの叫び声上がる。

「お前、何してるんだよ」恋人らしい男のどなり声。

甲が空き缶をも拾った時、頭はOLのスカートの中。体を起こした途端、変態行為になったわけだ。

「このヤロー」若い奴から足蹴りを食らう。そのままダウン。

今度は、別の女子学生の足元に倒れた。

「キャー、変態」スカートを抑える女子学生。好きでこうなったわけじゃないけれど、今は、好きなこの態勢。

「どけ、どけ」「じゃまだ、じゃまだ」サラリーマンや学生の男たちに踏まれる。

どうせ、踏まれるなら女王様の方がいい（こうした状況でも、まだ余裕の甲。さすが、人生の達成者。パチパチ。作者からの拍手）、と思う間もなく、革靴や運動靴の餌食のまま、甲は、交差点のまん中で、意識を失いつつあった。手にはコーラの赤い缶を握りしめながら、呼応するかのように、信号も青が点滅しだして、赤に変わろうとしていた。

三の六 海子・空子 の場合

「かったるいよねえ、海子」

「そうね、空子」

「がっこ、行く？」

「いいんじゃない？」

「昨日も行ってないよ」

「おとといもよ」

「そうか」

「そうよ」

「でも、学校はOKなんだ」

「そりゃ、そうよ、金払ってるもの。あたしたちお客様よ」

「あんたが？」

「まさか。親よ」

「問題さえ起こさなければ、やめさせられることはないわ」

「もんだい？」

「けーさつぎたよ」

「その点は、あたしたち大丈夫」

「親、心配してないの」

「だって、親も朝帰りだもの。あたしのことどころじゃないよ」

「そうね、あたしんちもよ」

女子高校生が二人、駅前のベンチに二人座っている。昨晩は、男仲間と、バイクで隣の県まで行って、太平洋から上る太陽を見てきた。

「太平洋の朝日っていいね」

「朝日っていいよ。瀬戸内海の太陽と比べものにならないね」

「比べたくないよ」

「なんか、なんにもないところから太陽がでるんだもん」

「不思議だね」

「不思議だよ。その点、何、瀬戸内海って・・・」

「何が？」

「ほら、島や山から、太陽が出てくるじゃない」

「出てくるね」

「あたし、それが許せないの」

「なんで？」

「ほのぼのしすぎてのよ」

「ほのぼの？」

「そう、気合が足りないのよ」

「気合が？」

「そう、気合よ」

「まるで、あたしたちの生活とおんなじ。だらだらだらだらしても、全然変わらない」

「だけど、太平洋も一緒じゃない？」

「一緒じゃないよ。台風も来れば、大雨も降るし、強風も吹き荒れる。そんな自然のたくましさ、ここにある？」

「ないない。あるとしたら、水不足」

「それ、たくましさ？」

「何にもできないまま、干からびてしまう、アマガエルと一緒によ」

「今日は、いやあに、カラムのねえ、海子」

「べつに、いつもそう思ってるよ」

「ほんと？」

「ホント」

二人は並んで太陽を見る。屋根の形をした山の上に、太陽が出ている。先ほどまでは、赤い太陽だったが、今は黄色だ。

「太陽は、やっぱ、赤よね」

「そうね、燃えあがってるもの」

「あたしも、燃えたい」

「セーラー服の下、赤のシャツじゃない」

「まずは、かっこうから」

昨日、遊んだ男たちは、疲れたと言って、帰って行った。今日、現場があるんだ、親方や先輩が厳しんだと言った奴もいた。どうせ、つきあうなら、最後までと思うけど、所詮、男も、この世間にとりこまれてるんだ、と海子は思う。だからと言って、自分に何ができるわけじゃない。そのことを空子に言う。

「いいじゃん、適当に距離があった方がいいんだよ。うちだって、じいちゃんとはあちゃんとは離れて住んでいるから、かあちゃんも、疲れなくていいんだって、言ってたよ。あいつらだって、働いてもらわないと、あたしたちだって、遊べないじゃない」

「そりゃそうだ」

「でも、それじゃあ、男に養われていることになるよ」

「違うよ、養わさせているんだって。受け身じゃないよ。あたしらは女王様よ」

海子は強いと思う。考えていないようで、考えている。このまま、あたしたち、二人なのか。

「お腹空いたね」

「お腹すいた」

「駅前に、マックがあるから行こうか？」

「行こうよ」

だが、そのためには、交差点を渡らないといけない。今、二人は、公園のベンチだ。この公園には、昔、お城があったが、火事で燃えたそうだ。実は、当時の政権に逆らわない、従順な意思

を示すために、自ら燃やしたと言う説もある。

バッカみたい。海子は思う。その時の、かっこばっか。今、天守閣があれば、おとのさま気分になれたのに。男って、やっぱ、バカだと思う。

その公園のベンチから二人は立ち上がった。ちょうど、その時、電車が到着した。客が降りる。その客の波にのまれて、だらだら歩きの二人が入る。信号は赤だ。先頭で止まる。後ろは気ぜわしい。

「なんか、待つのがいやだね」

「そうだね」

「あたしたち、自由だもんね」

でも、今は自由じゃない。信号を待っている。あたしたちの意思じゃない。青に変わった。どっと押し寄せる人波。あの向こうに行かないと、自由が得られない。でも、この交差点を渡るのは自由じゃない。

一体、みんな、何を考えて、この交差点を渡っているのだろうか。なんにも考えない。多分、そうだろう。何か考えていたら、この人ごみの中に突っ込んでいくなんて、死にいくようなものだ。

息が苦しい。息ができない。顔を上げる。交差点の真ん中で立ち止る。隣を見る。海子も一緒だ。金魚鉢の中の二人が口をすぼめて、アップアップしている。そんな二人を、人々は、水の流れをせき止めるゴミのように避け、分かれていく。信号が点滅する。

二人は、交差点に取り残された。

三の七 職 定年 の場合

「今日も、ここに来てしまった。いや、来たくて、来てしまったんだけどな」

職 定年。六十歳。この春、三月に、目出度く、会社を定年退職。大学を卒業し、会社に入社し、転職することなく、同じ会社で全うできた。三年周期で、日本全国に転勤を繰り返すとともに、子会社への派遣もあった。

それでも、何とかやりくりして、最後は、本社の部長。まあまあ、満足できる会社人生だった。たまたま、四十歳の時に、このT市の支店に転勤となった。いつかは、一国一城の主、つまり、家を建てたいと願っていた。残り、会社人生も二十年。このT市は、自分の出身でも、妻の出身でもないけれど、何かの縁だと思い、終の住処と決めた。預貯金をかき集め、銀行でローンを借り、一軒を構えた。家が建ち、すぐさま転勤。

皮肉な物だが、紙一枚、上司の口頭の一言で、日本全国を東に西に、右往左往。費用は会社持ちの、ちょっと長い旅行だと納得すれば、それはそれで楽しいものだった。家は、不動産屋さんを通じ、赤の他人に貸し、家族で引っ越した。

ただし、定年前の最後の三年間は、子どもは大学生となり、単身赴任。帰って来たのが、この三月だ。家は二十年建つが、周囲は知らない人ばかり。それでも、妻は三年前から住んでいるので、近所づきあいができるが、自分は誰も知らない。家でくすぶっていても仕方がないので、健康を兼ねて、ハローワークに通う毎日。だが、いかんせん、仕事はない。

求人はあるものの、年齢が六十歳、前歴が管理職では、雇いづらいのか。毎日ハローワークに行くので、職員とも顔見知りとなるが、いくら知りあいになっても、「今日、いい仕事ありますよ。職さんのために、とっておきましたよ」という嬉しい声はかからない。反対に、済まなそうな顔で、あいさつしてくれるぐらいだ。こちらも、かえって恐縮する。

ハローワークは朝の九時から開所だ。それより三十分前に行って並ばないと、かえって、二時間、三時間待ちとなり、精神的にも肉体的にも疲れきってしまう。そこで、朝、七時過ぎには家を出て、八時前から駅前の二階のスタバで時間待ちをしているのだ。

最初は、本当に暇つぶしだったが、交差点を行き交うサラリーマンやOL、学生などを見ると、つい、一か月前までは、自分も、全く同じだったんだとうなずき、感慨深い気持ちになる。みんな、朝早くから、ご苦労さまだと思う。行き交う人を見ては、あいつは銀行マンだな、あいつは公務員だな、高校生か、ちゃんと学校に行っているのか、など、勝手な妄想ができて、以外に楽しい。

五十を過ぎてから、老眼になった。いくら遠くが見える老眼でも、この店から交差点まで詳細に見渡すのは難しい。そこで、買ったのが、双眼鏡。スタバから双眼鏡越しに、スクランブル交差点を覗いている。時には、デジカメで写真を撮り、自分のブログに張り付け、更新もしている。題名は「スクランブル交差点からつぶやき」だ。

そんな彼がいつものように、本日のお徳用コーヒーを注文し、二百八十円を支払い、カップを持ったまま階段を上がる。フロアは全面大きなガラス張り。窓側のカウンターのちょうどまん中が、一番よく見える場所だ。そこが彼の指定席だ。

駅前から、ところてんが押し出されるかのように、アリの大群が放出された。みんな、自分の蜜や餌を求めて散らばって行く。その中でも、流れがあり、商店街に行く方、中央通りに行く方、海辺に行く方に分かれる。うまく流れに乗れなければ、自分が望む方向とは違う方向に流されてしまう。そんな人は、上から見れば、アップアップしているのだから。

中には、人波の流れに逆らって、強引に、我が道を進もうとしている者もいる。背広の上からでも筋骨たくましい体をしていることがわかる。だが、多勢に無勢。俺は違う、こっちに行きたいんだ、やめてくれ、と、ここまでは聞こえないけれど、叫んでいるのだろうが、そのまま流されていく。

所詮、人間一人の力なんてそんなものだ。賢い人間は、違った流れに乗ったとしても、無駄なあがきはやめ、とりあえずは流されて向こう岸に渡り、信号が変われば、自分の進みたい方向に向かっている。ジグザグ方式だ。こうしたことが、この窓ガラスの前に座っていると、毎日のように行われているがわかる。個人にとっては、初めての経験だが、集団にとっては、毎日、繰り返される行為。なんだか、不思議だ。つい、一か月前までは、自分も、あの、アリたちと同じように、流れに乗っていたが、流れからはずれた途端、流れが何だったのか、わかるような気がする。

今日もまた、双眼鏡をのぞく。いつものように、アップアップしている奴がいる。両手を挙げて、大声を挙げている。無駄な行為だ。近くまで行って、肩をとんとんと叩き、あきらめなさいと声を掛けたくなる。そんな奴が、今日は、ひとり、ふたり、さんにん、いやに多いな、よにん、ごにん、おっ、最高記録か、ろくにん、ななにん、もいる。これまでの観察史上、もっとも多い。俺のギネス記録の更新だ。早速、メモしないとイケない。

「あらら。あいつら、本当に取り残されているぞ」

いつもは頭の中での会話だが、あまりに馬鹿げていたので、つい、声に出してしまった。恥ずかしくて周囲を見る。だが、誰も自分のことを見ていないので安心する。ここから、再び、モノグローブ。

交差点の真ん中で、人がいる。いち、にい、さん、しー、ごー、ろく、なな、と、思わず、シャッターを切る。間抜けな顔面だ。早速、パソコンに取り込んで、ブログを更新。題名は、「スクランブル交差点のホームレス」

毎日、同じような人の流れだったのに、今日は違う。ありがたい話だ。たまには違う一日を送らないと何か死んだような気がする。いくら、定年退職の身分だから自由奔放とって、こうも毎日同じことの繰り返しじゃ、飽きてしまう。自分から変えようとしても限界がある。だから、こうして、積極的に社会と関わろうとして、人々の生活を観察しているのだ。

ささやかな俺の生きがい。そうしたらようやく見つかった日々の暮らしとの相違点。よかった。あいつら、車にひかれないように注意しろよ。いや、待てよ。ひょっとしたら、決定的瞬間が撮れるかもしれない。不謹慎けども、交差点に取り残された人々に、車が突っ込んで、死傷者がでるかも。

その写真を俺が撮り、マスコミに渡すわけだ。高値で売れるぞ。そして、マスコミは、その写真をネタにこんな状況に追い込んだ道路を管轄する行政や警察の不手際を追求する。小さな煙を

無理やりにでも煽いで炎にして、大火事にしてしまう。俺は思うのだが、行政なんて、なんの力もない。公権力だなんて、見かけ倒しだ。弱者こそ、弱者であることを持って、強者になることができるのだ。これは、彼が会社の苦情対策で実感した真実だ。もちろん、水や空気や安全がタダだと勘違いしている、安全牌の社会においてではあるが。

四 取り残された七人と犬一匹

交差点には七人と犬一匹が取り残された。お互い知らない同士だ。自分のドジさ加減を知られないように、うつむいたり、空を見上げたりして、顔を合わさないようにしている。当初、とまどう七人であった。周囲をトラックやタクシー、バスなどが走る。佇む交差点の真ん中は狭い。ようやく信号が変わり、それぞれの行きたい方向へ進もうとする。だが、四方八方から人が横断してくる。それぞれの目的方向に多勢がいるわけだ。無勢の七人ではどうにもならない。再び、元の交差点の真ん中に押し返されてしまった。その繰り返しは何回か続くうちに、一人、また一人と動くのをあきらめ、交差点のまん中に座りこんだ。結局、七人と一匹がそのまま残った。

互いに会話を交わすことなく、座りこんだ七人と一匹だったが、そのうちの一人が何となく呟いた。

「俺たち、どうなるんだろう」

その言葉をきっかけに、全員が誰に向かってではなくしゃべり出した。

「どうにもならないよ」

「変だよな」「変だよ」

「どうして、交差点から抜け出させないんだろう」「どうしてだろう？」

「みんな、渡っているのに」「そう、みんなだ」

「みんなじゃないよ。ここの七人以外だよ」「一匹も追加してくれ」

「俺たち、特別なのか？」

お互いに互いの頭の前から足の先まで見つめる。

「特別なようで、特別じゃない」

「いや、特別な奴もいる」「ほっといてくれ」

「ここはアリ地獄かな」「砂じゃない。アスファルトだ」

「引っぱり込む砂の女もいないし」「何、それ？」

「交通事故で死んだ女の亡霊のことだ」「まさか？」

「新たなる都市伝説だ」「今、作ったんだろ？」

「怖い」「怖くないよ。そんなものないよ」

「じゃあ、何故、あたしたち、ここから出られないの」

「やっぱり、窪みがあるんじゃないの？」「傾斜はないよ」

「どちらかと言えば、雨水が流れやすいように道路の中心部は盛り上がっているんだ」

「よく見ているんだ」「仕事柄だよ。ガードマンをやっているんだ」

「じゃあ、車の交通整理はお手の物だね」

「まあね。でも、相手が言うことを聞いてくれれば、の話だけど」

「聞いてくれないの？」「聞かないよな」

「そう言う意味では、個人国家だ」「そんな大げさな」

「それも一理ある」「あたしもそうだもの」

永遠に続くダラダラ話。

五 決定的瞬間の観察者

職はトイレから戻って来た。決定的写真はあきらめた。自分はそれほど暇じゃないからだ。最初は、他人のドジを笑うだけであったが、そのうちに、七人が大波小波のように行ったり来たりしたりしながらも、最終的に交差点の真ん中戻ってくるのを不思議に思った。

なんだから、あいつら、本当にドジだよ。さっさと抜けちゃえばいいのに。よりによって、通勤・通学客に逆らって動くなんて。あれ、可笑しいぞ、あいつら。折角、交差点から抜け切ったのに、また、戻ってくるなんて。押し流されているのか。まさか。海水浴や川遊びじゃあるまい。

あっ、信号が変わった。あの七人、また、交差点の真ん中だ。あと、何かいるぞ。犬か。犬が一匹だ。そういえば、この駅の近くに銅像があったぞ。犬の銅像だ。まさか、その犬がまぎれこんだのかな。そんな馬鹿な。あんまり再就職先が決まらないので、朝から寝ぼけているのかな。いや、朝だから寝ぼけているんだ。おっ、クラクションが鳴り響いている。

そりゃあ、そうだよなあ。交差点の真ん中に人がいたんじゃ、車の方も危なくて仕方がない。でも、あいつらだって好きで交差点の真ん中にいるんじゃないんだろ？少しは、車の方も相手の立場になって考えてやれよ。

それにしても警察官はどこだ。この駅の広場には、確か交番があったはずだ。まだ、八時過ぎか。ここは、住み込みの交番じゃないから、本署からの出勤か。それじゃあ、いざ、事件・事故があったときに間に合わないぞ。警察に電話してやるか。

おっ、信号が変わった。あいつら動き出したぞ。今度もダメだ。また、押し戻されている。どんくさいやつらだ。だが、可哀そうだ。うーん、このアンビバレンツな心境。また、元の黙阿弥、観阿弥、世阿弥だ。あいつら交差点を舞台と勘違いしているんじゃないのか。だから、交差点の中を行ったり来たりして遊んでいるんだ。

そうか、そうなんだ。これは路上劇なんだ。青年よ、中年よ、老年よ、街に出よ、交差点に出よ、だ。こらこら、街に出るのはいいけれど、新聞を捨てるとは言っていないぞ。

最近の日本人は全くマナーがない。困ったもんだ。俺が個人のプライバシーを覗くことがなかったら、スクランブル交差点で右往左往する人や、たばこの吸い殻を投げ捨てる人、見出しだけ読んだ新聞を捨てる人を見つけることはできなかつたらう。そうだ、新聞に交差点でゴミを捨てる人々を投書してやろう。ささやかな社会改革だ。

いや、待てよ。投書された新聞社も、自分たちの新聞が読むに値しないから捨てられたんだ知っているから、俺の投書なんて受け付けないかもな。残念だ。折角、金一封、図書券、商品券の獲得チャンスだったのに。おっ、そろそろ、ハローワークの開所の時間だ。名残惜しいけれど、さて、行くか。あんまり、この店にいと、変な客かと思われて、通報されても困る。

彼は、飲み干したコーヒーカップを片づけると店を出た。

六 警官 権藤 力 の場合

今日も何もないよな。あつたら困るよな。自転車をゆっくりと漕ぎながら、権藤力は呟く。定年まであと二年。だが、今年一杯で、退職することに決めた。無事、仕事を終えてきた、つもりだ。子どもたちは家を出た。妻はパートで近くのスーパーに勤めている。家のローンも支払い終わった。すべてが結びへと向かっている。こんなときに仕事では何もなくて欲しい。

その代わり、家の方は大騒動だ。実家の父と母がボケ出した。認知症だ。母親の方は、最初、厭がっていたが、二回の階段からこけて骨折したことから、病院に入院し、そのまま関連の介護施設に入所できた。父親は元気だ。だが、これが問題だ。元気な認知症ほど困るものはない。テーブルの上に置いた金がなくなったと言っては電話がかかってきて、かけつくと玄関先の靴入れの上に置いている。妻が返って来ないと叫び、近所を、時間を問わず、放浪する。その度に、近所の自治会長や民生委員さんから連絡が入る。

仕事が仕事だけに、いつまでも近所の人々の好意に甘えているわけにはいかない。電話があつてすぐさま駆けつければ、「権藤さんも大変ですね」と表面上は同情してくれるが、内実は、いいかげんにしてくれ、自分の親だったらさっさと引き取れ、というのが本音だろう。それは当り前の事だ。

自分も仕事上、徘徊する老人を保護することがある、一度や二度ならば、仕方がないと同情し、迎えに来た親族に「大変ですね。御苦労さま」と声を掛けるけれど、度重なると、「いいかげんにしろ。あんただけを保護するのが俺たちの仕事じゃないんだぞ」とつい声を出したくなる。もちろん、こちらにも税金で生活している身分だ。顔は、御苦労さんという顔をしている。所詮、人は、立場、立場でしか動けないし、動かざるを得ないのだ。

まあ、自分の親じゃないけれど、最近は、一人家族、一人でも家族というのか疑問だが、いわゆる、族になっていないわけで、家は一軒だが、生活しているのは一人、つまり家単と言った方がいいのかもしれない。その家単、つまり、一人暮らしの人々が増えたせいで、いろんな事件、少し大げさだが、問題が発生している。

家単の人々のうち、最近は、後期高齢者、いわゆる七十歳以上の人だけでなく、六十歳前後でも、ぼけが始まっている。家ではテレビだけが話相手。返事がない。言葉のキャッチボールがない。一方的な垂れ流し。しゃべるだけで、聞く相手のことは考えない。

そのため、他人に対し、不寛容。自分のしゃべりたいことだけしゃべり、一方的に、自分の立場だけを、自分の言いたいことだけを相手に突きつける。相手との妥協なんて関係ない。自分の欲望を、相手が聞き入れるかどうかだけが問題だ。聞き入れなければ、大声を上げる、泣き叫ぶ。手足を振り回す、少々の暴力行為も、精神的疾患を武器に無罪放免となる。こうなるのも、一人暮らしという生活パターンのせいなのか、

それだけじゃないだろう。食べ物の影響もあるのではないか。一人暮らしのため、どうしても、食べ物が偏る。好きな物だけ、食べたい物だけを食べる。朝は、食パンとインスタントコーヒー。昼は、うどん。このK県、T市は、うどん店が多く、また、値段が安いから、どうしても昼食はうどんになってしまう。

もちろん、うどん店が悪い訳ではない。このあたりが、まだまだ、公務員気質が抜けないところだ。誰も悪くないように言わないと、後から、無用なトラブルを起こすからだ。常に、煙幕や黒幕を引いて、自分の立場をはっきりとさせず、ぼやかしたままにしていた方がいい。あちらも立てて、こちらも立てる。シーソーの真ん中に立って、どちらともが、勝ったり負けたりしないように気を使わなければならない。

だが、そんな考えももうすぐ終わりだ。退職すれば、そんな気を使うことから解放される。元公務員、元警察官という肩書はのかないけれど、も一と一うの昔に、そんなものは捨てちゃいましたと言えればいいのだ。反対に、これまで、市民から言われてきたことをそのままオウム返しに言えば、相手は黙ってしまう。伝家の宝刀だ。よく、元教諭、元公務員、元警察官が一番たちが悪いと言うけれど、多分、現役時代の反動が、退職後に現れるのだ。ある意味では職業病だ。許して欲しい。誰に対して？

話は戻る。一人暮らしの食生活だ。そう、昼間は素うどんばかりを食べる。うどんの主な原材料は、小麦粉と水と塩だけだ。これに出汁を入れるが、この出汁も、かつおや煮干しに、醤油と水だ。どう考えても、食生活が豊富で多彩とは言えない。

ちなみに、自分がうどんを食べる時、必ず、野菜のかき揚げを注文する。これで十分だとは言えないが、ささやかな抵抗だ。さて、夕食と言え、コンビニかほか弁の弁当か、チェーン店の牛丼だ。繰り返すようだが、コンビニやほか弁屋、牛丼チェーン店が悪い訳じゃない。これしか食べようとしなくて、つまり偏食する、偏食しかしない奴が問題なのだ。いつも、唐揚げか、焼き肉など肉類が中心で、野菜を食べようとしなくて、食べたとしても、おまけついでに、しなびたレタスやキャベツを食べる程度だ。時には、その貴重なレタスさえも残してしまう奴もいる。当分の間は、体に異常をきたさないが、この偏食の無理が次第に積もり積もって、早ければ還暦を迎える前に痴呆が始まる。

その証拠に、以前、家に戻れなくなった痴呆の男を、頭から吊っていた住所入りのカードを基に、パトカーに乗せて送り届けたことがある。その時、部屋を開けたら、安の上、万年床の横に食べくさしの弁当が半分だけ残っていた。どうみても、フライ物が主で、野菜のかけらも見当たらなかった。その男は、放浪を繰り返し、駐車場であぐらをかいているところを住民から通報で、市役所の職員の手に乗って、施設に入所となったと聞いている。ああ、無情だ。

繰り返し言うけれど、コンビニやほか弁の弁当、牛丼店など、外食産業が悪いわけじゃない。摂取目標1日三十品目、自分の体は自分で守るんだと意識なかった奴が悪いんだ。自己責任は置いておいて、困ったら社会が悪い、の一点張り。この繰り返しだ。じゃあ、社会って何だ。単に個人の人間の集合体じゃないのか。社会という幻想に寄り掛かり、過大な要求をしているだけじゃないのか。

おっと、あっと言う間に、派出所だ。本署からチャリンコで五分。いやあ、職場に近いことはいい。さあ、鍵を開けて、お茶を沸かし、一服するか。あれ、なんだ。あの人盛りは。

権藤はスクランブル交差点に近づく。交差点は赤。今は、車が走っている。それなのに、交差点のまん中に人がいる、それも一人じゃない。ひい、ふう、みい、いやー、こんふうに数を数えるのも久しぶりだな、よー、いつ、むう、なな、人だ、それに犬が一匹。あいつら何している

んだ。

交差点の中は、タクシーやバス、トラックに、宅配便の車などがほとんど車間距離の間もないまま、左車線も右車線も走り続けている。ここは、JRや私鉄、空港までの高速バスや市内循環バス、タクシー、すぐ傍には、フェリーや高速艇など、公共交通機関の結節点であるため、車などの交通量も多い。また、近くには、シンボルタワーなどのオフィスビルや国出先機関の庁舎もある。ホテルもある。人も多い。そんな中で、わざわざ交差点の真ん中で立ち往生するなんて、なんて奴らだ。フェリーに乗るのか、大型トレーラーが横ぎる。

「あぶない」

権藤が大きな声を出す。車が通り過ぎた後に、黒い煙幕に覆われた。七人は大丈夫か？いた、ひい、ふう、みい、よお、もういい、七人とわかった。犬も一匹だ。無事だったか。安心するも、早く、救出しないと。女子高校生が咳き込んでいる。そりゃあ、当然だ。あんなに排気ガス吸っちゃあ、まともでいられない。それにしても、遠目だからわからないが、あの女子高校生たち、色が黒いぞ。排気ガスで染まったか。排気ガスギャルだな。そんあ、冗談を言っている場合じゃないぞ。信号はまだか。車線の信号が点滅しだした。横を見ると、知らない間に人が一杯だ。

そりゃあ、ここは、復唱するが、公共交通機関の結節点だから、人が多いのはわかるが、どうして、毎日、毎時間、毎分と人が集まって来るのだ。人が集まると言うよりも、人が湧いてくると言った方がいい。

この地方の気候は、瀬戸内式気候だから1年を通じて晴天が多く、降水量が少ない。だから、いつも、梅雨の時期が気になる。この時期にまとまった雨が降らないと、夏の間中、水不足で困ることになる。盆を中心とした夏祭りにだって、やるのか、やらないのか、ひと悶着となる。

もちろんやればいいのか。祭りをやめたからといって、雨が降る理由はないのだ、だが、世間には、必ずといっていいほど、一言言いたい奴がいて、「水不足なのに祭りをやるのはけしからん、即刻、中止だ」と、何の責任もなくわめき立つ。祭りの開催の是非を問う前に、お前のあまのじゃくの精神で、晴ればかり続くおてんとさまに雨を降らしてみろ、と言ってやりたくなる。

とにかく、雨が降らない地方だから、空から雨が降らなければ、地面から水が湧いて来ればいい。早い話が、人の代わりに、地下水が湧けばいいということだ。全然、関係ない話だったな。

人が、一直線状、および、その後ろに、運動会の徒競争のように、二列、三列、よ、いつ、むう、うーん、十列以上並んでいるぞ。当然、対面にも、同じぐらいの人が並んでいる。ホントに、全く、どこから、人が湧いてくるんだ。まさか、墓場から起きがってきたゾンビじゃないだろうね。

だが、安心したまえ。日本では、よっぽど山奥の、神式じゃないと、そのまま死体を埋葬なんかしていないぞ。本当は、法律上、死体の埋葬なんかできないのだろうけど、自分が小学生の頃、母親の故郷のK県の山奥では、確かに、母親のじいちゃんの死体を土に埋めたはずだ。俺も、仕事柄、法に触れるような行為は慎まなければならないけれど、この仕事に就く前の事だ。とうに時効だ。

とにかく、宗教上、死体を土葬じゃなく、火葬にするようになって、おばけも変わってしまったんじゃないか。日本でも、以前は、ゾンビのように死体が甦るような恐怖があったのだろう。だから、死体を折り曲げて石を抱かしたりしたんじゃないだろうか。

確かに、死体が甦ったら怖い。火葬が普及してからは、幽霊も、体が燃えちまった以上、ゾンビのように死体として甦るのじゃなく、足がなく、魂が、怨念が甦ると信じられるようになったのじゃなのいか。自分はもうすぐ仕事をやめる。やめてからは、日本全国で、まだ、土葬が風習として残っている地域で、ゾンビ伝説が、死体が甦るといふ言い伝えがないか、調べてみたい。うーん、自分も、たまにはいいことを思いつく。よし、日本のゾンビ伝説の調査、これが俺のライフワークだ。

その前に、交差点の真ん中で、立ち往生している生きた人間を助けないといけない。信号が変わった。さあ、ダッシュだ。なんだ、あいつら、動こうとしないぞ。怪我でもしているのか、病気なのか、それとも、好きであそこにいるのか。

おっととっと。ここから真ん中まで、斜めには進めなおい。おい、俺は警察官だぞ。市民が困っているんだ。助けに行かないと。だが、自分の身長百六十センチ。同じ世代の人にとっては低くはないが、現代小学生や中学生でもそれぐらいの身長はある。若い女性も同様だ。女性は、誰も知っているからこそ、正々堂々と知っている間に身長が五センチ以上も高くなるハイジャンプヒールを履く。そのため、百六十センチなんて、一回でクリアできるぐらいの身長となる。

上から見下ろされる警察官の自分。残念だが威厳がない。犬だって、人間を飼い主と思うのは、餌をくれるだけじゃなく、人間の身長を見て、自分よりも大きいので恐れをなしているんだと言われている。くそ。覆面パトカーじゃないけれど、今すぐ、頭にサイレンを付ければ、この危機的状況から脱出できるのに。今度、携帯型サイレンを上司に要望しよう。とにかく、今は待てない。

権藤は、何とか、昔、ため池で覚えた得意の犬かきで、この人波をかき分け、交差点のまん中で沈んでいる人々を救うため進もうとするが、思うように前に進まない。警察だ、警察だと大声を上げて、声はすれども姿が見えないせいで、誰も避けようとする。

こうなればと、百八十センチ級のアルプス人間の谷間を縫って進もうとするが、目的地から離れるばかりだ。救出すべき者は疲れて座りこんだのか、この位置からは見えない。どうにもならない。信号が点滅しだした。これじゃあ、俺までもが、スクランブル交差点難民だ。信号が変わった。

「きゃー」

「まだ、人が通ってんだよ」

そんな叫び声とも悲鳴とも思われる声が飛ぶ中、車たちは、一斉に走り出す。四つんばいとなり、息も絶え絶えの権藤。ようやく陸の孤島に辿りつけた。そこで七人と一匹から、憐みの目を持って歓迎を受けた。

七 市職員 他方 優 の場合

リリリーン、リリリーン。

「はい、T市役所道路課の他方です」

電話を取る他方。ベルが三回鳴るうちに、電話をとるのがこの市役所の決まりだ。道路課にかかってくる電話なんて、どこそこの道路に穴が開いているだとか、その穴にけつまずいて怪我をしたとか、怪我をしたから補償しろだ、とか、犬や猫の死体があるから何とかしろだ、とか、車が突っ込んでケヤキの木が倒れているとか、道路の植え込みにゴミが溢れているだとか、市民から感情もろ出しの苦情が多い。

その度に、落ち着いて電話をとり、まずは、相手の内容をよく聞いて対応する、なんて、マニュアルどおりにはいかない。「すぐに来い」とか、「税金泥棒め」とか、「お前じゃわからん、課長を出せ」とか、よくもまあ、他人に対して罵詈雑言が言えるものだと感心してしまうぐらいの言い方である。

大人しく聞いていると、「お前、聞つきょんか」と怒鳴られるし、説明しようとしたら、「お前の説明なんか、聞きとうないわ」と怒られる始末だ。一体、どうすればいいんだ。そう、日々苦悩しながら、電話の対応をしている。

だが、毎日、苦情の電話（それが仕事とわかっている、市民のためになるんだとわかっている）だと精神的にもまいることもある。

まだ、市役所に採用されて三年目の他方。小学校から中学校、高校、大学まで、ずっと地元のT市に住んでいる。かれこれ二十五年目だ。だが、それだけ住んでいても、T市の地理や状況を全て把握しているかと言えばそんなことはない。

小学校の頃は、家が学校から一分も離れていなかった。始業のベルが鳴り始め、家を出ても間に合うくらいの距離だ。もちろん、そんなことはしない。と、言いながらも、不思議なことにと言うか、当たり前というか、家が近い人に限って、学校に来るのが遅い。近い分だけに余裕があるのか、送れない安心感があるのか、他方もいつも、クラスメイトでは、一番教室に入るのが遅かったことを思い出した。

中学校になると、他の小学校とも一緒になるため、自宅からは、徒歩で十五分ぐらいの距離になった。学校行き帰りや、他の小学校の友だちの家に遊びに行くことも増え、生活圏は、小学生の頃に比べて、少しだけ広くなった。しかし、それで、地元が変わりはしない。

たまに、部活のバスケットボールの練習試合で、市内の他の中学校に行くことがあった。同じT市内だけど、他方にとっては、全く見知らぬ土地であり、自分以外の場所にも、同じように中学生が住んでいる、生きているということが驚きであり、新鮮でもあった。

高校は市の中心部にあったが、他方の家からは通学に自転車を使えば十分もかからなかった。ただ、市の中心部に向かうことは、「街に行く」という気持ちが強く、少し、憧れめいた気持ちではあった。

街、なんて楽しい響きだ、これまでも、親と一緒に街に行くことはあったけれど、自分一人で行くとなると、状況が変わる。少しわくわくするような期待感と、少し大人の世界に立ち入る不

安な気持ちがあつたものだ。ただし、たかが高校生。生活の環境は、小学生や中学生に比べて、大きく広がったものの、社会がコーンのソフトクリームならば、まだ、先っぽを舐めた程度だ。

その後は、大学生。都会の大学への憧れはあつたものの、残念ながら、合格発表板の前に番号が掲載されたのは、地元の大学だけであつた。大学生活では、当然のことながら、高校生に比べて、生活状況は一変した。市外はもちろんこと、県外からも同級生や先輩が来ている。

アルバイトも始めた。マスコミの報道関係のぼうやだ。記者からの電話で記事をとったり、气象台から決まった時間にかかってくる天気予報を所定の用紙に記入し、お天気ボードに晴マークや雨マークのテロップを張り付けたり、また、夜の事件や事故に対応するため、記者やアナウンサーと一緒に報道室の簡易ベッドに泊まり込んだりもした。大人の社会の一端に触れた気がしたものだ。再びの例えで言えば、社会がコーンのソフトクリームだとしたら、舌先で三回以上は舐めたのと同じくらい、社会と関わりを持ったような気がした。

卒業近くになり就職先を探したが、高校生の頃の夢をかなえることと、自分がマスコミ関係でアルバイトしていたこともあり、出版社や放送局など、マスコミ関係の仕事に挑戦してみたけれど、落ち続け、十二月になっても就職先は決まらなかった。

留年も覚悟して、来年度の学費等を稼ぐために、お歳暮シーズンに地元の百貨店でアルバイトしていた時に、何の風の吹きまわしか、サンタクロースが年も押し詰まった暮れの二十五日に、T市役所の合格通知書をプレゼントとして運んでくれたのだ。

今まで、サンタなんか信じていなかったくせに、このときほど、感謝の念を抱いたことはない。信じる者は拾われる。そんなことを考えていると、目の前の電話が鳴った。今日で五本目だ。

「駅前の交差点で人が立ち往生しているで」

「立ち往生？事故ですか？」思わず聞き返す。

「事故かなんか知らんけど、交差点の真ん中で人が動かんようになってるで」

「わかりました」

それだけ言うと相手の電話は切れた。匿名だった。冗談だろ？先輩から、声がかかる。

「なんか、苦情か、苦情にしては、短かかったな」「ええ。駅前の交差点の真ん中で、人が動かないそうです」「動かない？怪我か、それとも、病気か？」「わからないそうです」「まあ、とにかく、電話があつたことだし、いっぺん、行ってみたらええわ。もし、何かあつたら、連絡してくれ。近くに交番もあるし、怪我や病気だったら、救急車を呼んだらええわ」「はい、わかりました」

他方は、先輩からの指示を受け、現場に行くことにした。本庁舎から駅前まで自転車で十分。携帯電話をズボンのポケットに押し込め、作業着をひっかけ、事務室を出た。

八 群がるマスコミ

「だいちゃん、準備いい？」 「いいよ、こーちゃん」

こーちゃんと呼ばれた男がカメラを肩にかついで返事する。

「秀樹もOKか」 「OKです」

カメラマンの後ろの照明用のライトを左右各一個持った若い男が頷いた。目の前をトラックや営業車などが走る。交差点では、信号待ちの通勤・通学の人々が、信号が変わるのを今か、今かと待っている。マラソン大会の出場選手のように、スタートだけに命を掛ける。少し、大げさか。信号の赤丸が暗くなり、青丸が輝きだした。

「よし、いくぞ」

こーちゃんと呼ばれた男はマイクを持っている。桜庭宏一。記者だ。突撃記者で名高い。これまで、数々の現場で飛び込み取材をしている。元々はアナウンサーで、ニュース番組に出演していたが、元来の強面のため、視聴者から「犯罪者が何でニュースを呼んでいるんだ」とお叱り？の苦情が多かったため（他人には、容貌や風体で人を判断するな、というくせに、失礼なやつらだ）、記者に転向した。

だが、小学、中学、高校、大学とサッカーのフォワードで鍛えた、突っ込み精神で、数々のスプークを得て、今では、この放送局はもちろんこと、日本を代表とする記者（本人の弁）になった。全国各地で、事件が発生すれば、相棒のカメラマンのだいちゃん、こと、今川大輔と、カメラマン見習いで、照明の本村秀樹と一緒に全国を飛び回る。

今川大輔は、元、バスケット選手。突撃するひろちゃんを、軽やかにステップを踏みながら、後ろから前から、横から前から、時には、這いつくばって下から上になめたり、照明の秀樹に肩車をさせ、俯瞰的に映像を撮ったりする。そのカメラワークが、より一層、現場の雰囲気を出し、視聴者からも好評である。桜庭が局内でニュースを読んでいる時は不評だったが、一旦、現場からの報告になると、その強面が功を奏してか、視聴者からは、現場と一緒にいるようで臨場感があっという間、お誉めの言葉をいただいている。

いやはや、何が吉と出るか、凶と出るかはわからない。桜庭も狭いアナウンサー室にいるよりも、大都市だけでなく、地方都市など、全国各地を飛びまわる方が性に向いている。人生、何が幸いするかわからない。

放送局内にて。

昨日の夕方だ。デスクの四権から呼ばれた。

「桜庭、取材だ。地方から面白いニュースが入って来たぞ」

「どこです」

「K県T市だ」

「何の取材です」

「T市の駅前のスクランブル交差点の真ん中で、何人かが立て籠もっているらしい」

「立て籠もるって、交差点の真ん中でしょう？四方八方、吹き抜けじゃないですか？まさか、銃

や刀、楯でも持っているんですか？」

「いや、相手は素人だ。女子高校生から、サラリーマン、おばあさん。それに、ホームレスもいるらしい」

「そんな奴らが、交差点の真ん中で何をしていますか？」

「わからん。わからんから取材だ。今から飛行機の最終便で飛べば、間に合う。市内のビジネスホテルに泊まって、朝、一番に取材してくれ。題名は「地方からの独立の声」。三十分の独占報道特集だ。インタビュー頼むぞ」

「「地方からの独立の声」ですか？そんなおおげさな。単なる、どんくさい奴らが、交差点を渡り切れなかったんじゃないですか？」

「事実なんて問題じゃないんだ。事実の裏側にある、真相をえぐり出すのが俺たちの仕事だ」

「事実と真相と同じじゃないんですか？」

「事実は、単に、交差点で立ち往生している、かわいそうなカナリアたち。真相は、現在の日本の政治、経済、福祉など、社会に不満を持つ庶民の市民一揆だ。その心情を俺たちマスコミが掬い取ってやるだけだ」

「と、いう、ストーリーにするんですね」

「そういうことだ」

デスクであり、プロデューサーの四権は、にやっと笑った。

「わかりました」

「カメラマンは？」

「今川だ。いいだろう？名コンビの活躍を期待しているぞ。そして、できるだけ、盛り上げてくれよ。ストーリーに乗っ取って。はみだすのは大いに結構だ。面白きなき世を面白く、だ」
桜庭は、デスクの声に黙って頷いた。

T市駅前。

「できるだけ、盛り上げてくれか。素人がどこまで神輿に乗ってくれるか難しいけれど、面白可笑しく取り上げてやれ。終われば休息だ。確か、このT市はうどんが有名だったな。しかも、朝の五時からオープンしている店もあると聞いた。そんなに早くから客が来るのかなあ。この取材が終われば一杯食べるか。なあ、だいちゃん」

「いいとも、こーちゃん」

「僕もいいです。ちゃんと調べています。ほら」

本村は、ジーンズの後ろポケットから、半分に折ったうどんマップを取り出した。

「いつの間にだ」

「昨日の晩です。ホテルのカウンターに置いてありました」

にやっと笑う桜庭。桜庭は、本村の機転の利くところを気にしている。日本全国取材していると、それぞれの気候や風土、食生活などが、そこに住む人に影響を与え、独自の事件を引き起こしているんじゃないかと思う。毎日のように取材に走り回っているが、落ち着いたら、これまでの取材をまとめて、生活環境と犯罪との相関関係の本を書きたいと思っている。が、今は、

パソコンの日記に、ページ数が、容量が増える一方だ。

「さあ、取材開始だ」桜庭が時計を見た。今川がカメラを桜庭に向ける。その後ろに本村が立つ。

「おはようございます。ここは、T市のJR駅前です。昨日から、交差点の真ん中で動かなくなった人たちがいます。女子高校生から、サラリーマン、高齢者の方々の七人と犬が一匹です。一見、繋がりや関係がなさそうに見える人ですが、どうして、彼ら、彼女らは、未だに交差点の真ん中にいるのでしょうか。このスクランブル交差点に何があるのでしょうか。今から、桜庭宏一が、単独、突激インタビューに向かいます」

「よし、OK、こーちゃん」

今川は、桜庭の強面から足早にスクランブル交差点を渡る人々のベルトコンベアで流されているかのような画一した顔、そして、自分たちが注目されているとも知らず、まだ、眠いのか、眠気まなこの七人の顔をアップで捉える。

「さあ、行くぞ」

信号が変わった。三人のクルーが、他の通勤・通学客とともにスクランブル交差点の中央に向かう。ただし、目的地は違う。三人は、まん中で途中下車だ。大都会での混雑ぶりに慣れているとは言え、やはり、ラッシュアワーにはいつも辟易する。

一体、どこからか、こんなに大勢の人間たちが湧いてくるのか。そう、集まるというよりも、突然、沸く、湧く、涌く、という方が適切だ。そのせいで、ラッシュアワーに出くわすといつも頭が惑いて仕方がない。とにかく、流れに乗って、流れに飲み込まれないように、目的地へ着き進め。先頭の桜庭が後ろを振り返る。今川と本村が眼で頷く。

「今、私は現場に来ています。スクランブル交差点から動かなくなった七人と犬一匹は、今も、現場を占拠しています。直接話を聞いてみます。彼らの目的は一体何なのでしょう？」

「これは、今の政治への警鐘ですか？それとも、政治体制への異議申し立てですか？」

突然、マイクが突き出される。顔を上げる七人。交差点の真ん中で、今日も、出勤の人々を何の感慨もなく眼で追っている。

「けいしょう？」

「いぎもうしたて？」

互いに顔を見合す七人。桜庭はマイクのスイッチをオフにする。

「あんたたちは、今、日本のヒーローなんだよ。この停滞する社会や経済、政治、福祉制度。こうした現制度に対して、国民全体を代表して、声をあげんたんだろ。だから、こうして、交差点の真ん中を占拠してんだろ？」

再び、顔を見合す七人。年長者の瀬戸内がゆっくりと答える。

「いやあ、そんな大それたことじゃないよ。たまたま、スクランブル交差点を渡ろうとしたら、四方八方から来る人々に弾き飛ばされて、ここにいるんだよ」他の人も続いてしゃべる。

「そうよ。ほんとうは、向こうに渡りたかったのに、人が多すぎて前に進めないの」

「何回もやってみたけど、無駄だったので、ここで休んでいるだけだ。交差点の真ん中を占拠しても仕方がないだろう」

「ほんと、車の排気ガスって、ひどいわね。げほげほ」

今度は、三人のクルーが顔を見合す。

「いやあ、そんなことはない。あんたたちは、自分ではわかっていないけど、潜在意識の中で、この日本に対して、不満があったからこそ、こうした行動に打ってでたんじゃないの？」

「こうした行動？」

「交差点の占拠だよ」

「だから、さっきも言ったように、俺たちドジだから、たまたま前に進めなかつただけだよ」

「いや、違う。たまたまで、七人も人間が交差点の真ん中で立ち往生するわけがない。あんたたち七人は、この国の現状に憂いを抱き、国民全体の代表者として、この国を変えようと動き出したんだ」

「俺たち、何にもしていないよ」

「いやあ、これは、立派なことなんだ。あんたたちは、今、自分が置かれた立場を知らないかもしれないが、よくやってくれた。同じ国民として、同士として、賞賛するよ」

「そん、おおげさな」

「そんなにすごいことなの？」

「まさか？」

「いや、この記者さんの言うとおりかもしれんなあ」

「うーん、どうしよう？」

「それで、あたしたち、どうしたらいいの？」

桜庭は、その言葉を待っていた。

「独立するんだよ。この国から、このK県から、このT市から」

ここにいるみんなが一緒に口を動かした。「ど、く、り、つ」と。

九 大同団結

「どうする？」

「どうするって？」

「独立だって」

「ほっておいたらいいんだ。マスコミが俺たちをそそのかしているだけなんだから」

「でも、何かいいね」

「なんで？」

「自分たちの国だって。今まで、この街で生きてきたけど、国だなんて意識はしてなかったから」

「そりゃそうだ」

「日本人だってことも当たり前だと思っていたよ」

「日本人という意識もなかったわ」。

「でも、こんな地方のT市でも、外国人、そうアメリカ人やイギリス人、フィリッピンやペルーの人なんか、街中で見かけるよ」

「話したことは？」

「ない」

「そりゃ、そうだ。同じ日本人だって、話すことなかったもの。ここの七人だって、昨日までは、知らない人だものね」

「交差点でもたついた七人だから」

「一匹も、追加していただけますか」

甲が呟く。コロもワンと鳴く。

「あっ、忘れていた」

「やっば、俺たち、ここに新たな国家を作ろう」

うんこ座りをしていた、昭が急に立ち上がった。

「独立するの？」

地べたに体育座りをしていた海子が、首だけ振り返った。残念ながら、昭の顔までは見えない。

「そうだ、独立だ」

昭は自分を納得させるように頷いた。

「何、馬鹿なことってるの」

「馬や鹿じゃない。俺たちは人間だ」

「屁理屈ね」

「俺たち、何も悪いことしていないじゃないか。反対に、交差点に立ち往生して、困っているんじゃないか。それなのに、警官やら役所の人やらが来て、俺たちを追い出そうとする。それなら、いっそのこと、独立しちゃえ。あのマスコミの人が言うとおりのだ」

「どうやって？」 「こうやってだ」

宏は、自分のTシャツを脱ぐと、棒に突き刺した。

「さあ、独立宣言だ」

「バッカみたい」

「みたいじゃない、馬鹿丸出しだ」

「丸出しは、上半身だ」「もういいよ」

「水は出ないの?」「水?」

「よくあるじゃん。地面に杖を突くと、水が溢れ出るって話」

「水じゃなく、温泉ならいいのに」

「道路の下は地下駐車場だ。出るのは、排気ガスくらいだ」

「そんなことより、棒だけじゃ弱いよ」「弱い?」

「国家だったら、囲まないと」「囲むの?」

「そう。みんな、手をつないで輪を作るの」「手をつなぐの?」

「俺、トイレに行った後、手をあらってないけどいいかな」

「きったなあ」「手からだけなら感染しないよ」

「お遊戯みたいだねえ」「懐かしいよ」「くるくる回る?」

七人は輪を作った。象の檻みたいだ。でも違うのは、中心を排除するのではなく、中心を守るためだ。

「ここから中が、あたしたちの国」

「でも、ずっと手をつないでいたんじゃ、トイレにもいけやしないよ」「あんたの話、トイレばかりね」

「喰って、動いて、出して、寝る。人間の基本行動」

「それなら、こうすりゃいい」

宏は、信号が青の間に、工事用のコーンを自分たちの周りに置いた。

「こりゃいい。手を離しても、トイレに行けるぞ」「もういいから」

「よし、これで、俺たちの領土が確立したぞ。行き場のない俺たちに国が出来たんだ。もう、警察から追い出されることはないんだ。俺たちの国なんだ。領土なんだ。今後の交渉相手は、警察じゃない。日本国家だ。首相でも、大統領でも、元首でも、議長でも、総理大臣でも、誰でも出てこい」「誰を呼びたいの?」

「いいぞ。いいぞ、宏」「いいぞ、いいぞ、宏」

海子と空子の女子学生コンビは賛成で一致した。

「何か、面白いことしたかったんだよ、あたしたち」

「そうよ、面白いんじゃない」

「かわいいかも」「かわいいよ」「かわいかないよ」

「何でも、かわいいか、かわいくないかで判断するのはどうかな」

「あんたの意見、かわいくない」

「そんなことより、みんなどうだい?」

若気の至りか、若さゆえか、宏は交差点の真ん中に立つ。

「あたしゃあ、いいよ」

正江は賛成の意を表した。

「どうせ、帰っても、ポロアパートが待っているだけ。ここに、いれば、つまらない奴だけど、まあ、話し相手はあるし、家でテレビに向かって話すのは飽きたし、病院も年寄りばかりだから」

「つまらない奴は言い過ぎ」

「どちらかと言えば、下水管に詰まったゴミのようなものね」

「座布団一枚」

「そりゃあ、言いすぎた」

「いいや、その通り。俺たち、この交差点の真ん中で、どん詰まりの状態なんだ」

「なるほど、うまく言う」

「だから、状況打開ね」

「批評家はいい。実行するだけだ」

「独立だな」

「おう、独立だ」

「新国家が生まれたぞ」

「新国家ねえ。うん、いい響きだ」

「やっほー」

「それなら、やっぱりこれがあるな」

瀬戸内は腕時計をはずすと宏に渡す。携帯電話が普及すると時計なんかつける必要がなくなった。それでも、営業マンである瀬戸内は、相変わらず腕に時計をつけていた。有名ブランドのバツタ品だ。

「何で時計なの」

「時間を制する者が国を支配するんだ。もう、明石の子午線を気にしなくてもいい」

「何か、学校で習った気がする」

「たこやきのこと？」

「あんたは、黙ってる」

棒の先にTシャツ。その上に腕時計。国家ができあがった。

「国の名前は？」「スクランブル交差点国」

「わかりやすいね」「そのままじゃない」

十 うどん屋にて

「桜庭さん、うまくいきますかね。ずるずる、かむかむ」

「ちょういもんだよ。ずるずる、かむかむ」

「地元では、うどんはかまないんだろ？ずるずる、かむかむ」

「ええ、うどんマップにはそう書いています。ずるずる、かむかむ」

「じゃあ、どうするんだ。ずるずる、かむかむ」

カメラマンの中北が聞く。

「飲み込むそうです。麺を喉越しで味わうそうです。ずるずる、かむかむ」

「喉で味わうのか。ビールと同じか。じゃあ、この人間は、喉に舌でもついているのかい。ずるずる、かむかむ」

「さあ。そうじゃなくて、舌が喉までのびるんだと思います。ずるずる、かむかむ」

「いやあ、喉に歯が生えているんだらう。ずるずる、かむかむ」

「何を馬鹿なことを言っているんだ。ずるずる、かむかむ」

「あーあ、うまかった」

「ごちそうさま」

「替え玉、ひとつ」

「ラーメン屋じゃないですよ」

「そうか。T市の住民は、毎日、こんなに安くてうまいもん食っているのか。何杯でも喰えそうだな」

「そうですよね。うどん二玉に、野菜の天ぷら一つで三百九十円。レジでお金を払う際に、思わずサンキュー、ってお礼を言いましたよ」

「うまいこと言うな。うまいついでに、今度は、うどん屋に突撃インタビューでもやるか」

「ちょっとやわらかいネタだな。デスクが何と云うかだな」

「いやあ、このうどんはコシがあって固いですよ。お土産に持って帰れば、デスクだって、うんと言いますよ」

「とにかく、この取材が成功してからだ。ごちそうさま。ごくごく、すっぱり」

三人のクルーは、うどんのつゆまで一滴残らず飲み干すと、立ち上がり、トレイをセルフサービスのカウンターに運んだ。

「桜庭さん、旗があがっていますよ。成功です」

先に店を出たライトマンの本村が慌てて戻って来た。桜庭と中北は顔を見合わせる。

「さあ、ひと仕事するか」

「もちろん」

「俺たち、テレビに出ているぞ」

宏は携帯のワンセグをみんなの前に差し出した。

「ほら、ここに映っている」

携帯の画面に映る七人と一匹。みんなが宏の周りに集まって来る。

「どれどれ」

「ほんとだ」

「よく見えない」

「あんたも、携帯持っているんだろ？」

「電池がもったいない」

「嘘つけ。駅前で盗電しているくせに」

「さっきの取材ね」

「早いもんだ。もう編集して放映だ」

まずは、駅前から交差点のまん中が映し出される。次に、Tシャツと時計がアップで映る、そのあと、記者の顔が写り、宏の顔もアップだ。マイクが突き出される。インタビューに答える宏。画面上では、少したよりなさそうだ。とても、独立宣言をするような顔じゃない。

「だから、いやだと言ったんだ」

「でも、あの強面の取材記者よりはましよ」

「ほんと、記者の顔の方が犯罪者みたい」

「俺たち、犯罪者じゃないぞ。自由を求めて立ち上がったヒーローだ」

「少し、たよりないけれど」

「だから、七人いるじゃないか」

「と、一匹ね」

「これで、有名になったのかな」

「心配しないでも、誰も見ていないよ」

「でも、以前、ミニコミ誌に名前が載ったら、海子ちゃん、出てたでしょう？って言われたわ。テレビだもん、絶対、みんな見ているわ」

「でも、俺なんか、いつもテレビは点けっぱなしで、時計の代わりにしているよ。その時は覚えていても、すぐに別のニュースが流れるから、記憶も一緒に流れてしまい、アナウンサーがさっき何のニュースを読んだか忘れてしまっているよ」

「そうだよな。今、この交差点を流れていく人と一緒だよ」

「頑張ってください」

真面目そうな女子高生二人からバナナが差し入れされた。全部で八本。ありがたいことに犬の口の分まである。犬もバナナを食うのか。

「あっ、ありがとうございます」

受け取ったのは昭。スクランブル交差点国の外務大臣だ。

「あの一、ちょっと、入ってもいいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

訪問者の案内が彼の仕事だ。案内と言っても、半径二～三メートルの円の中の国だ。一眼でわかる。だが、国家である以上、収入を得ないといけない。資源のないスクランブル交差点国だ。唯一の観光資源は、七人と一匹。まるで見世物小屋だ。それでも、何とかやっていかないといけない。

「ありがとうございます」

女子高生たちは、一歩中に入る。革靴は磨かれて光っている。

独立国家だ。当然、入るのには許可がいる。でも、許可と言っても、工事用のコーンを少し、ずらすだけだ。

「この中に入ると、何だか元気になります。外国に来たみたいです」

「そうですか？私たちは変わらないですけど」

「ありがとうございました」

女子高生たちは、礼を言うと、信号が変わらない間に、スクランブル交差点国から立ち去った。

「さよなら」

手にバナナを持ったまま、女子高生に手を振る宏。

「なに、でれでれしているのよ」「そうよ。くさったバナナみたい」

在住の女子高生が突っ込む。

「バナナは腐る前がうまいんだよ。それに、何か、青春だなあ、と思って」

「何が青春よ、あたしたちだって、女子高校生よ、ねえ、海子」

「そうよ、空子」

「いろんな女子高校生がいるんだ」

「それ、どういう意味？」

「まあ、まあ、仲間割れしないで」

「誰が、仲間よ」「同じ国民だ」

「へえ、今時、バナナか」

「あら、知らないの。今、バナナが静かなブームだよ。毎日、一本、朝食を摂ること、健康にいいんだよ」

「安いしね」

「あんたたちは知らないかもしれないけど、あたしがまだ子どもの頃は、お祭りになると、バナナのたたき売りがあったんだよ」

「へえ、ばあちゃんにも子どもの頃があったんだ」

「生まれた時から、ばあちゃんじゃなかったんだ」

「いいかげんにおし。とにかく、露天商の人がバナナを売るんだけど、ただ、スーパーのように

陳列台に並べて売るんじゃない、口上をつけて売るんだよ」

「工場？」

「バナナは農場だろ」

「違う。口上。客の顔を見ながら、独特のしゃべりで、客の心を掴み、ひとふさ、そう二十本ぐらいを、客の顔を見ながら値段を下げて売るんだよ」

「今の、フリーマーケットみたいなもの？」

「素人じゃないよ。プロだよ。客との漫才みたいなものだね」

「そう言えば、お茶碗や皿などのたたき売りもあったらしいね」

「今なら、国家だって叩き売りかな」

「ははははは」

「てめえら、何かこつけているんだ。ふざけるな」

罵声とともに、コーンの外からスポーツ新聞が投げつけられた。投げつけたのは、おっさんだ。どうみても、堅気には見えない。領土が侵食された。

「何！」

宏が新聞を掴み、投げつけた男を睨むが、男は既に、交差点を渡りきっている。

「ほっとけ、ほっとけ」

年長の瀬戸内が宏をなだめる。

「それより、これ何だ」

瀬戸内が宏の手から新聞を取る。一面に、赤、青のゴシック体の文字で、紙面の三文分の一を占めるほど、七人と犬一匹の写真が掲載されていた。表題は「小さな独立運動・大きな波紋」

「おっ、すげえな」

「一躍有名人だ」

「でも、映りが悪すぎるわ」

「仕方がないよ、新聞紙だもの」

「そのうちに、雑誌が取材に来るよ」

「フォーカス？」

「何か、背中に視線を感じるぞ」

七人が駅前の方に降り返った。北側だ。犬も頭が北、尻尾は南を向く。カメラマンが望遠レンズでこっちを向いている。思わず手を振る七人。コロは、ワンと吠えた。

「やっぱ、言ったとおりだ」

「早いね、マスコミは」

「ネタは旬のうちが売りだから」

「俺たちもネタ？」

「そんなものよ」

「じゃあ、いつかは忘れられるかも」

「早く、忘れて欲しいね」「忘れられたら、既得権だ」

じゃらん。十円玉と五円玉が目の前に置かれた。

「南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛、・・・・」

通りがかりの白装束のお遍路さんが立ち止まり拜んでいく。この街は、四国八十八か所のへんろ道が通っている。

「おっ、新たな外貨の獲得だ」「賽銭箱でも置く？」

「そりゃいいかも。棒から社に拡大だ」

「それなら、もう一本、棒がいるよ」

「俺たち、生き仏か？」「生き神でしょう」

「そんなに、えらくないよ」「どちらかと言えば、下層級」

「でも、どこかで、転じれば、上層にいけるんじゃないの」

「神風、突風が吹けばね」「やっぱり、社がいるよ」

「その答えが、スクランブル交差点難民ってわけ？」

「いやあ、ちゃんと交差点の中で定住しているよ」「束の間だけどね」

「じっとしてられない俺たちか？」

「人間、みんな、そうだよ。体を喰わすために住居を構えるんだ。それでも頭は放浪したいから、夢を見たり、祭りをしたり、戻って来ることを前提とした旅をして、欲求不満にならないようにしているんだ。だけど、俺なんかは、喰うために彷徨っているけどね。なあ、コロ」

「ワン」

「さすが、放浪癖三十年。悟りきっているね」

「いや、悟らされているだけだよ」

十二 独立国見学ツアー

「さあ、みなさん、二列に並んで」

ツアー客が、添乗員の旗の下に集合する。

「本日は、スクランブル交差点国見学のツアーに御参加いただき、誠にありがとうございます。私は、色物観光の添乗員、初見満足です。それでは、今から、ニュースで御存じのように、日本で初めて、交差点の中で独立した、スクランブル交差点国の観覧ツアーに出発します」

「国家なの。じゃあ、パスポートがいるの？」

「そんなの持ってないよ、聞いてないよ」

添乗員の説明も聞かずに騒ぎ出すツアー客。

「皆さま、静かにしてください。ツアーにパスポートはいりません。勝手に、国家だとほざいている七人です。国は国でも、国じゃありません」

「じゃあ、国って何？」「囲まれたところ」

「じゃあ、家も国なの？」「国家というじゃない」

「あたし、国さんという姓のおうちかと思っていた」「馬鹿な」

「そんな難しいことはおいて、さあ、急ぎますよ。わずか二十八秒で、信号が変わります。その間に、渡り切ってしまわないと、皆さまも、交差点の真ん中で、ホームレスになってしまいますよ」

「あなた、大丈夫かしら？」

太り過ぎを既に通り過ぎた女性が、右隣の旦那らしき男に話かけている。その男と言え、妻とは反対に、ジャコメッテイの作品のように、他人にエネルギーの貯蔵をゆだね、必要な時だけお小遣いをあげるわと妻に言われながら、結局は、弁当持参で会社に行っていたサラリーマンの出で立ちであった。

「心配するな、お前。こう見えても、昔、小学校の徒競争で1番をとったことがあるんだぞ」何の自慢にもならないことを吹聴しながら、妻は妻で、とりあえず聞いただけのような顔で、ツアーコンダクターの顔を見ている。

「うん、あたし好みだわ。初見くんね。今度、サインをもらおう」

信号が点滅しだした。長いようで短い人生のうち、数十秒の時間を待てない車が、前方五十メートルからアクセルを吹かしながら通り過ぎて行く。黄色はもちろんのこと、赤信号でも突っ込むつもりだ。歩行者は、特に欲しいわけでもないのに、バーゲンの五十パーセント引きと言うセールス文句に魅かれて、五十パーセントのお金をもらったかのように、季節はずれの衣料品セールに飛び込む客と同様に、今か、今かと、信号が変わるのを待っている。

「さあ、まいりますよ」

ツアーコンダクターが後ろを振り返る。身構えるツアー客たち。徒競争の要領で、右手を前に、左手を後ろに構える

「私のこの旗を目印に、わき目も振らずに必ず着いて来てください。そして、決して、立ち止ることのないように。スクランブル交差点国を横切る瞬間だけ、私が笛を吹きます。その時だけ、

横を向いてください。でも、一瞬ですよ。ここは、スクランブル交差点です。もし、何かの拍子で立ち止れば、別の方向からの集団に巻き込まれて、目的地に着けません」

「巻き込まれたらどうなるんです」

「最後です。全く違う場所に連れていかれて、私たちと離れ離れになります。もし、そうなったら終わりです。ひょっとしたら、三途の河に流されるかも知れません」

「そうだべ、そうだべ」

敬老会の一員は、真剣に頷いている。

「向こう側に着いたら、番号を呼びます。呼ばれた番号の方は、必ず返事をしてください。たくさんの人ですから、名前を呼んだのでは、道行く人も返事をして、誰か確認ができません。それじゃあ、予行演習をします。前から順に番号を呼びます。一番「はい」二番「はい」「三番」……。三番。三番はいないのですか。ほら、そこの二人。あなたたちが三番ですよ。困りますねえ。みんな集団で動いているんですから、きちんとしてもらわないと、他の人に迷惑がかかります。わかりましたか？」

「はい」

「それじゃあ。行きますよ」

信号が変わった。一斉に飛び出す人々。それぞれ、会社や買い物、など、目的があろうか、あるまいか、わからないが。兎に角、信号が変わった。兎も飛び出す、亀も飛び出す。一斉にスタートだ。向こう岸まで渡ってしまえ。

そこのけ、そこのけ、オイラが通る。そこのけ、そこのけ、アタシが通る。人にぶつからないよう、体を横に向け、いつか見た水族館の鯛の群れを、見よう見まねで真似しながら、あの時の、水族館の入館料二千円は高かったなと思い出し、いつかはこうして役に立つ時もあるんだ、と、わずかばかりの元手は取り戻せたことを喜びながら、渡りきるサラリーマン。

いやいや、世界は自分を中心に回っているんだ、だから、誰にも気兼ねすることなく、正々堂々と歩いていけばいいんだとばかりに、何故か、両手に袋をぶら下げて、縦の成長が止まった後は、地球の重力にはかなわないと、横に進出を始めた体を持て余しながらも、後ろ指は差されることなく、時には、急ぐ人に背中を突き飛ばされようが、ガニ股の足をしっかりと地面に付け、持ち上がらない足を滑りだしながら歩く中年のおばはん。

こうした人々の中を観光客ツアーが通るのだから、何事も起こらない方が嬉しい、いや、可笑しい。案の上だ。「あーれー」ツアーの参加者のおばあさんが、反対方向から流れてきた集団に押し流されていく。「待ってくれ、ばあさん」おじいさんが手を伸ばす。しわしわの手、しわしわの指、しわしわの皮膚が一瞬、張りを持つ。ばあさんの手も、指も、皮膚も同じだ。

そう、今から、五十年前。じいさんが、まだ、二十歳。ばあさんが、十八歳。じいさんの出身は、九州の南のある田舎。ばあさんの出身は、東北のある寒村。二人とも、家からは口減らしのため、本人たちは自立のため、都会に飛び出した。出会ったのが、近畿地方のある工場。そこで、ロマンスが生まれた。うーん、なんて、いい響きだ。そのロマンスが二人の一生を変えた。そこでは、当然、二人の手も繋がれた。何回繋がれたことだろう。

だが、子どもが生まれ、仕事が忙しくなり、残業が続く毎日。妻もパートだ。疲れて帰ると、

ビールと野球中継。その繰り返しの中で、夫がスーパーの買い出しの袋を持つことはあっても、妻の手を握ることはなかった。あれから五十年。ローンで買った建売住宅も自分たちと同じように歳より、子どもたちは広い世界に飛び出し、再び、二人だけの生活になった。

誰も見ていない。だが、手を握り合うことはなかった。そんな生活の中で、再び、旧婚旅行を兼ねたツアー参加。旅行中も手を握り合うことはなかった。だが、今は違う。ばあさんが人の波に飲み込まれていく。なんとか、助け出さねば。恥ずかしがっている場合ではない。じいさんは手を伸ばす。ばあさんも手を伸ばす。五十年ぶりの手の触れ合い。

「ばあさんも歳とったね」「じいさんこそ」そんな会話も交わすことなく、ばあさんは出発した地点に戻されていく。

「ばあさん!」「じいさん!」二人の叫び声も、スクランブル交差点の行き交う群集の足音、世紀末まで後何秒かを告げる信号機の音、一秒たりとも無駄にできないように、だが、ガソリン代は無駄にしてもいいように、カラ吹きエンジンを吹かす信号待ちの車の音に、かき消された。一刻の猶予もない。

流されるばあさん。意を決したじいさん。ばあさんを助けるため、ツアーを離れ、荒波の人波に飛び込む。だが、そこに斜め方向から、なんとなく塊っている意思なき集団がやってくる。ばあさんが流されるのとは四十五度異なる方角。泳ぐ、泳ぐ、じいさん。六十年前に海で鍛えた立ち泳ぎや犬かきだが、この寄る歳波に人波の海は泳ぎきれない。

「ばあさんや」「じいさんや」これが二人の最後の声であった。

「隊長。大変です」

「誰が隊長ですか。私は添乗員です」

「ナンバー七のじいさんとばあさんが流されていています」

「だから言ったじゃないですか。ちゃんと、この電車ごっこの紐から出たら危ないと

「どうするんですか」

「どうしようもありません。全ては流れに任せるしかありません。でも、心配しなくても大丈夫です。後、十秒もすれば信号が変わります。そうしたら向こう岸で倒れているのが発見できるでしょう」

「そんなものですか」

「そんなものです。さあ、みなさん、先を急ぎますよ。何かを成し遂げるためには、犠牲が必要なのです。何かを得たら、何かを失う。そう、みなさんも、これまでの人生経験から当然、知っていることだと思います」

思い思いに唇を噛みしめながらうなづくツアー客。

「さあ、急ぎましょう」

残り時間は三秒。交差点の信号が点滅しだした。ぴーぽー、ぴーぽー、ぴーぽー。点滅しだすと、何故か、気持ちが落ち着かない。特に、一部が黒ずみ、切れかかった蛍光灯がそうだ。切れるのなら切れろ。へびの生殺しみみたいに、中途半端に点いたり消えたりするな。蛍光灯の真下で、新品の電球を持ったまま立ち往生したことが、あなたにもあるでしょう。そう、そんな気分なのです。

「あっ、何かいる。あれ、何ですか。添乗員さん」

ナンバー八の定年退職者カップルが声を出す。

「あっ、すみません。笛を吹くのを忘れていました。あの人たちが、今、テレビで話題になっているスクランブル交差点国の住民です」

「国家って言ったって、何にもないじゃない。赤い工事用のコーンを置いているだけじゃない」

「寂しいね」「寂しいよ」「それに、あれ、何?」「何って」

「若い奴から年寄りまで。まるで、お祭りが終わった後に一斉に出される、空き缶やお好み焼きなど、分別されていないごみと一緒にね」

「人間生ごみ?」「いや、何か、匂ってきそう」

ツアー客たちは、指をさしたり、聞こえるような大声で悪口を言ったりしながら、ようやく、対岸まで到着した。

「いやあ、すごかったなあ」「ほんと、すごかったね」

「でも。楽しかった」「そう、楽しかった」

「旅って、いいね」「旅って、いいよ」

スクランブル交差点国のことは少しも話題にのぼらない。旅することが彼らの目的なのだ。目的地は、おまけでしかない。

到着するや否や、添乗員が叫ぶ。「号令!いち」「ハイ」「に一」はい」「さん」「はあい」「よん」「おっととっと、はい」「ご一」一秒の空白の後、「ふわい」「ろく」「はいっ」「なな」沈黙、「はち」「ははははい」「きゅう」「はい」「じゅう」「ハイ」

「返事がないのは、ラッキーセブンだけです。はい、わかりました」

添乗員は携帯電話で時間を確認する。

「それじゃあ、みなさん、ここで、三十分間のフリータイムです。喫茶店で休憩するのもよし、散策するのもよし、あの交差点で陣取っている方々をここから眺めるのもいいですし、記念写真を撮影するのもいいです。そうですね。今が、一時二十五分ですから、三十分後の、一時五十五分までに、ここに戻って来てください。私はラッキーセブンのお客様を救出に行ってきます。

はい、解散です」

添乗員は言い終わると点滅しだした交差点に飛び込んで行った。

十三 機動隊出動！

「あなたたちは、既に包囲されている。投降しなさい」

かなりたてるスピーカーから、機動隊の声が聞こえる。その後ろには交差点に立て籠もる七人を説得できなかった交番の警察官と道路課の職員が仲良く並んでいる。決定的瞬間を取り損ねたハローワーク通いのおっさんもいる。今も、カメラを構えている。その周りを何重にも包囲する群集、野次馬たち。

「さっさと、やめろ」「平成のヒーローだ。がんばれ」

「ふざけるな。英雄気取りするな」「権力に負けるな」

「冷たいジュースはいかがですか？」「ここはお祭りか」

「腹がへったな」「たこやきいかがですか？」

「交差点が通れないんだよ」「どうせ、用もないくせに」

「平成の大維新だ。日本なんかぶっ壊してしまえ」「既に壊れているよ」

「所詮、池の中のぼうふらだよ」「せめてカエルにして」

「ポップコーンはいかがですか？」「海水池の鯛の餌だ」

「何か言ってるよ」「何か言ってるね」

「気にするな。何事も、賛成する者もいれば、反対する者もいる」

「俺たちに主義主張はないよ。ここにいたいから、いるだけなんだよ」

「国家じゃないの」「そんなもの幻想だ」

「ばっかみたい」「そう、みんな、ばかよ」

「再び、繰り返す。あなたたちは包囲されている。速やかに、武器を捨てて投降しなさい」

「そうだ、そうだ。やっちなえ」「落ち着くんだ。みんな」

「何の武器なの、まさか、毒ガス、サリン？」「キャー、逃げないと」

「待て、待て。相手の意見も聞くんだ」「聞く前にこっちがやられるぞ」

「じいさんやばあさんを含めて、たったの七人じゃないか」

「犬も一匹いるぞ」

「一個の爆弾で、十万人が死んだ歴史がある」

「ひとりの命は地球よりも重いぞ」

「たかが重くても百キロだ。どこらへんが地球よりも重いんだ」

「まだ、言っているよ。大丈夫なの？」「大丈夫さ」

「俺たち、有名人かなあ」「テレビに映っているかな」

「ほら、映っているわ」「どのチャンネルもあたしたちよ」

「国会議員の選挙に出ようかな。そしたら、独立できるかな」

「もう、あたしたち、独立しているのよ」

「きゃー、テレビ、テレビ、あたし、明日からスターよ」

「何を馬鹿なことを言っているんだ。心配しなくても、あんたは、俺たちのスターだよ」

「そう、いつでもサインしてあげるわ」

「お前の頭の中は、毎日がお正月か」

「何、それ。あんた、毎日、お年玉くれるの？」

「馬鹿。金ぐらい、自分で稼げ。それぐらい、お目出度いということだよ」

「ふん。あんたにそんなこと、言われたくないわ。あたしのお尻ばかり追い回してたくせに」

「何を。そんな汚いケツ」

「汚くて悪かったわね。ちゃんと、毎回、ウオシュレットで洗っているわ。あんたこそ、和式便所で踏ん張ったままじゃないの」

「てめえ、このズベ公」

「ほうら、言葉で言い返せないものだから、怒って。あたし、これでも、現役の高校生よ。知性と美性が光輝いているの。あんたみたいに、人間力がドンづまりじゃないの」

「何が高校生だ。ろくに、学校も行っていないし、授業にも出てなくせして」「卒業しても、あんたどまりなら、たかがしれてるね」

「やめないか。仲間割れしている場合じゃないぞ」

前進を始める機動隊。その数、百人を超えている。相変わらず、のほほん状態で、口喧嘩を繰り返しながら、交差点の真ん中で占拠する七人と一匹。機動隊は楯を持って包囲している。片や、七人は何も持っていない、交差点の真ん中で座っているだけ。道路が全て包囲され、車や人は迂回しないと向こう側に渡れない。じりじりと七人と一匹に近づく機動隊。

「隊長、どの程度、進めばいいんでしょうか」

「一秒間に二センチだ」と、言ったものの、隊長自身がどの程度進めばいいのかわからない。

「全員に告ぐ。今から、一センチずつ進め」

副隊長が後ろの人間に告げる。

「二センチだって」「何で、二センチなんだ」

「二セの情報じゃないんのか」「伝言ゲームだ。間違いない」

「さっさと帰って娘に会いたいよ」「何、おセンチになっているんだ」

「俺、物差しを持っていないぞ」「程度がわからん」

「人差し指の第一関節が約二センチだ。その程度進め」

隊長の再びの指示。隊員の中には、胸から定規を振り出す者もいれば、言われたとおり、ひとさし指を地面につける者もいる。

その様子を見ていた、立て籠もって、いや、ただ単にアスファルトの上に座っているメンバーたちは、

「あいつら、何やっているんだ」

「これじゃあ、ここに到達するのに朝までかかるぞ」
「きっと、時間外手当をもらおうとしているんだ」
「くそっ、俺たちの税金を返せ」「お前、税金を払っているのか」
「いやあ、俺は払っていない。住民の代表として、言っているんだ」
「いつ、お前が住民の代表になったんだ」「誰も認めていないぞ」
「今だ、今の今。さっき今、この瞬間の今」
「もういい。それよりも、問題は、今のこの現状をどうするかだ」

バウムクーヘンの中心が狭くなっていく。お腹が空いた証拠の例えだ。機動隊やマスコミ、そして、赤の他人、家族、野次馬などで、カステラの層だけが厚くなっていく。こんなお菓子ならば、誰でも喜ぶだろう。食べても、食べても、カステラ部分が厚くなり、中心の空白が小さくなる。

いや、ひょっとしたら、この現象は、バウムクーヘンじゃなく、台風じゃないだろうか。周りの人々の熱気で、目の部分が小さくなり、圧力が増していく。もうすぐすれば風が吹き起こりそうだ。解散しようにも、解散できない七人。

「ここから、移動しなさいと言っているけど、これだけ囲まれたら、逃げ場所がないじゃないか」

「おしっこにも行けなくなっちゃったね」「トイレが好きだね」
「周りからの重圧がすごい」「注目されているんだ」
「人間の数に圧倒され、押しつぶされてしまいそう」
「人に酔っちゃうよ」「ノンアルコールの空気だ」
「加齢臭も襲ってくるよ」「元凶は、あんたじゃん」
「失礼な。あんただって、いつかは婆さんだよ」
「あたしは歳をとらない、きれいな婆さんになるんだから」
「婆さんは婆さんだよ。あんた若いくせに、腰も肌も、人生も曲がり角を過ぎているよ」「ほっといてよ」

「こらこら、仲間割れしてもしかたがないだろう。敵は目の前だぞ」
「もともと、仲間じゃないもん」
「敵ねえ。あたしたち、何も悪いことしていないよ。敵って言われてもねえ」
「あっ、母さんが手を振っている」「あたしのママはどこかしら？」
「息子よ。瞼の母は、ここにいるよ」
「あんた、ひとりもんじゃなかったの？」
「あたしにだって参加させてよ」
「それより、あたし、アイドルになったみたい、えーい」
「いつもカラオケでは二人きりだもんね、興奮するよ」
「一人がテーブルの上、一人が椅子に座って、応援だもん」
「何を呑気なことを。そんな状況じゃないだろう」

「じゃあ、どんな状況なの」

「日本は、平和な国だ」

「俺たちは、その平和に甘んじた、内なる国だ」

「外がぼけてりゃ、内もぼけるよ」

十四 必殺交渉人

「交差点に立て籠もっている七人に告ぐ。今から、あなたたちの身内の方が、あなたたちのことを非常に心配して、はるばる遠い所から来ている。近親者のためにも、今すぐ、そこから撤退しなさい」

「あんなこと言ってるよ」

「俺たち立て籠もってなんかいないよ。交差点のまん中でのいるだけだ」

「近親者って何？」「父親や母親や、兄弟や子どものことだ」

「今さら、来ても遅いよ」「つきあい、ないもの」

「友だちも来ているのかなあ」「あんた、友だちいたの？」

「ここにいる、みんなかなあ」「まさか？」

明治 正江の場合

「母さん」

聞き慣れたような声がする。正江は、機動隊の楯の向こう側を見る。そこには、装甲車が一台駐車しており、屋根の上には、占拠、いや選挙演説のように、マイクが一本立てられていた。マイクの後ろには、中年の男と女が寄り添うように立っている。

「母さん、俺だよ、俺。息子の孝だよ」

「母さん、わかる？娘の行子よ」

七人全員がマイクの声がする方向を見る。

「あんな、中年のおっさんやおばさんから、母さん呼ばわれするなんて、誰だ」

「あたしたち、もっと若いわ」

「俺は、男だ。母さんじゃない」

「誰か、知ってる？」

「年の頃なら、ばあさん、あんたじゃないの」

「あたしは、息子や娘とは十年以上もつきあいないよ。あんな奴なんか知らないよ」

「そう、あんただと思ったよ」

「じゃあ、誰が、関係者？」

「母さん、俺だよ、孝だよ。忘れちゃったのかい？」

「母さん、あたしよ。行子よ。そんな所にいないで、こっちに、いらっしゃいよ」

「母さん、そこの変な奴らに、騙されているんだろ？僕らが来たから、大丈夫だ」

「そうよ。母さん。テレビに映っている姿を見て、びっくりしたわ」

「子どもが、そう、母さんの孫の孝行が、大学受験なんだ。身内に犯罪者がいると、内申にも悪影響だから、早く、こっちに来てよ」

「そうよ、母さん。子どもの、母さんの孫の、初美が、もうすぐ、結婚なの。先日、結納も交わしたところなの。母さんにも、式に出て欲しいから、お願い。もう、そんなところに、立て籠もるのはやめて」

「あんたの、子ども、孝と行子なのかい」

「そうだったかな。忘れたよ」

「二人、合わせたら、孝行じゃないの」

「孫も孝行だって」

「そうだったかな。忘れたわ」

「とんだ、親孝行ね」

「母さん。お願いだから、こっちに来てよ。母さんにいつまでもそこにいられたら、こっちは、迷惑なんだ。俺や、子どもの人生を台無しにする気か。今日だって、仕事を休んでまで来てるんだよ」

「そうよ。母さん。これまで、あまり、連絡しなかったのは悪かったけれど、これからはちゃんとするから。こんな、いやがらせみたいなことをするのは、やめてよ」

「母さん」

「母さん」

「母さんが、いつまでも、そこにいるのなら、親子の縁を切らしてもらおうよ」

「あたしもよ、母さん。あたしたちの人生を、母さんのせいで、めちゃくちゃにされたんじゃ、たまらないわ」

「あんなこと、言ってるよ」

「あんたの息子と娘。あんたを助けに来たんじゃないの？それとも、縁を切に来たの？」

「あたし、疲れたから、よくわかんないわ」

明治 正江は、そう言うと、座りこんだ。装甲車の上に立つ孝と行子からは正江の姿が見えなくなった。

「母さん。もう知らないからね。これから連絡しないでくれよ」

「母さん。母さんがこんなに頑固だとは知らなかったわ。もういいわ」

明治 正江の子ども二人は装甲車の上から消えた。

「あんたの、こどもたちいなくなったよ」「こどもなんていないよ」

「こどもに捨てられたってこと？」「どっちが捨てたのかねえ」

「姥捨て山？」「姥捨て交差点だ」

「俺たちも、捨てられるわけ」「捨てられる前に、捨ててしまえ」

「次は、誰の近親者だ」

平成 昭の場合

「昭」

次に壇上に上がったのは、六十歳前の男だった。

「昭。いいから、家に戻ってきなさい。お母さんだって、お前のことを心配しているぞ」

「昭だって」「あんたのことだろ」

「ああ、俺の父親だ」「来てくれたんだ」「よけいな世話だ」

「昭。お前から何の連絡もなかったから、無事でいると思っていたが、まさか、こんなことになっているとは。とにかく、そんな変な仲間から抜け出して、こっちに来なさい。お前の人生はこれからだ。そいつらに狂わされたら、取り返しがつかなくなるぞ」

「俺たち、変な奴だって」「さっきも言われたね」

「それじゃあ、誰が変な奴の原因なの」「みんなかなあ」

「それじゃあ、矛盾するね」「うん、犬と猫だよ」

「それ、意味が通じない」「仲が悪いってこと？」

「わしや母さんや、だけじゃない。近所の人も、みんな心配している。これ以上、わしたちに迷惑をかけるのだけはやめてくれ」

「あっ、とうとう、本音がでたぞ」

「昭君のためじゃないんだ。自分たちのためなんだ」

「そんなもんじゃないの」「俺も自分のために、ここにいる」

「そこから、出てこないのであれば、もういい。二度と家に帰って来るな。お前は、勘当だ」

「勘当だって。いいの、昭君」

「いいよ。これで、五回目の勘当だから」

「もういい」

そう吐き捨てると、男は装甲車から降りていった。

山川 陸美の場合

「次は、誰かな」「何か、待ち遠しいね」

「あんたじゃない？」「わしには身内はいない」

「そうなの、それは寂しいね」「うっとおしくもない」

「睦美、あんた、何しているの」

次に、壇上に上がったのは、まだ、四十代の女性。この年代の女性を、一般的には、おばあさんと呼ぶべきなのであろうが、面と向かって、おばさんとは呼びにくい世代である。現在、女性の平均年齢は八十歳を超えている。四十歳と言えば、ちょうど、真ん中辺りだ。とりあえず、ここでは、おばさんにしておこう。その、おばさんが、おばさんのしぐさで、おばさんしゃべりをしている。

「子どもをほったらかして、また、変な男と遊んでいるかと思っていたら、まさか、そんなところにいたの。もう、いい加減にして、帰ってらっしゃい。あたしだって、いつまでも、孫の世話はできないんだから。あんたも親ならば、自分の子どもの世話ぐらいしなさいよ」

「睦美さん、呼ばれていますよ」「へえ、お母さんなんだ」

「若いのね」「単なる、おばさんよ」

「もう、いい加減にしてよ、睦美。あんたがその気なら、こっちにだって考えがあるんだから。もう、養子縁組して、孫は私の子どもにするよ。あんたに、元々、母親の資格はないんだから。いいわね」

「あんなこと、言ってるよ」「歳の離れた、お母さんだ」

「それって、子どもにとって、幸せなの」「難しい問題ね」

「子どもが望んでいれば、いいんじゃないの」

「睦美さんは、どうなの？」

「ああやって、いつもヒステリーを起こすだけ。あたしに似たのかしら？」「それって、逆じゃない」

「養子縁組の話だって、六回目よ」

「おっ、勘当の五回目を上回りましたか」

「記録は塗り替えられるためにある」「何の記録だ」

「いいわね」のおばさん言葉を最後に、おばさんは壇上から消えた。

瀬戸内 潮雄の場合

「瀬戸内君。君は一体、何をやっているんだ」

今度、壇上に上がったのは、恰幅のいい男だった。年の頃なら、六十歳前。企業で言えば、定年前。全国を転々として、ようやく登りつめたか、立ち止ったか、頭打ちか、である支店長の役職についた。

「瀬戸内君だって」「会社の上司？」
「ああ、支店長だ」「えらいんだ」
「会社ではねえ」「やめれば、ただの人」

「もう、そんな所にはいないで、さっさとこちらにきたまえ。本社からも連絡が入った。社会的信用のある我が社を傷つけるような行いをする者に対しては、断固たる処置をとりなさいとの指示が入っている。君は、まだ若い。未来がある。そんな変な奴らに騙されて、そこにいるんだろう。私には、君の性格がよくわかる。今回の件は、私からも、本社に対し、十分な説明をして、穏便に取り計らってもらおうよう、お願いするつもりだ。だから、一刻も早く、こちらに来なさい」

「やっぱり、俺たちのうち、誰かが悪いんだ」
「あんたじゃないの？」「俺じゃないよ」
「世間から見れば、みんな悪いんだよ」
「交差点のまん中でのいるから？」
「交差点の中心で、世界平和を祈っているのに？」「まさか」

「返答がないぞ。瀬戸内君。いつも、「おはようございます」や「お疲れさまでした」の挨拶をしているじゃないか。さあ、何とか言ったらどうなんだ。このままでは、指導力不足と言うことで、私の立場も危ういんだ。君は、自分だけでなく、他人である、私も陥れようとするのか。勤続三十五年。全国津々浦々の営業所や支店を巡り続け、結果的に、本社に戻れなかったこの私に、まだ、鞭を叩きつけようとする気か。もう、いい。もう、君は頸だ。解雇だ。懲戒免職だ。会社都合じゃないぞ。退職金や失業手当だってもらえないかも知れないぞ。それでも、いいんだな」

男は、言いたい放題に騒ぐと壇上から降りた。

「瀬戸内さん、会社に戻った方がいいんじゃないの。そうしないと、俺みたいになるよ」甲がコ
口の頭を撫でながら語りかける。

「大丈夫だよ。支店長は瞬間湯沸かしだから。それより、俺は甲さんを尊敬しているよ」
「尊敬だなんて。照れるよ。単なる、名無しの権兵衛だよ」
「だって、こうして生きているんじゃないか」「生きているねえ？」
「死んでいるんじゃないよね」「まあ、生きているか」
「自分で生きるってことが素晴らしいんだ。俺、会社、やめても生きていくよ。生きることには退職しないよ」
「じゃあ、退職はいつ？」「自己都合はしないよ。天命を待つよ」

甲 乙丙の場合

「よう、おっさん、元気か」

今度、壇上に上がったのは、身なり、風体とも定まっていない、おっさんか、おじいさんであった。七人の侍ならぬ、七人と一匹のの交差点ホームレスたちは、互いに顔を見合わせる。

「あんな変な奴の知り合いは誰？」

当然、全員の目が甲に集中する。

「甲さん、あんたの知り合いかい？」

「いやあ、よく覚えていない。最近、物忘れが激しいんだ」

「あんた、うまいことやりあがったね。一躍、有名人じゃないか。この機会に、あんたに貸したお金を返してくれよ。出演料がたんまりはいったんだろ。けちけちするなよ。幸せはみんなで分かち合おうぜ」

「あんなこと言ってる」「本当だったらいいのに」

「マスコミに取材料もらうか？」

「マスコミには広告料が入るのにね。あたしたちには一円もは行ってこない」

「こういうのを搾取というのかなあ」「無知の悲しみだ」

「警察に取り囲まれているんだぞ。そういう状況か」

「なあ、黙っていないで、何とか返事しろよ。俺とお前の付き合いじゃないか。水臭いなあ」男は、引き続き、しゃべり続けるが、少し、ろれつが回っていない。体の中でアルコールを製造し、自家発酵しているようである。

「甲さん。ほんと、あの人、知らないの？よ」

「でも、覚えていないよ、なあ、コロ」「ワン」犬も返事する。

「こんなに言っても覚えていないのかい。まあ、いい。わしも、あんたたちのことは知らないからな。えっ。ここは、大声選手権じゃないの？商品はもらえないの？それじゃあ、大声出して損した。腹が減っただけじゃないか。あーあ、損した。損した」

そう言うと、男は壇上から降りた。マイク越しに「あの七人の身うちじゃないのか。誰だ、あんな訳のわからない奴を呼んできたのは」

「すいません。本人が、是非、壇上に上がりたいと言っていたので、身内かと思いました」。

「もういい。後は誰だ。もういないのか」

海子・空子の場合

「まさか、甲さんの知りあいが壇上に立つとはね」

「いや知り合いじゃないよ」

「後、関係者がいないのは誰？」 「高校生の二人だ」

「お父さんやお母さんは？」

「知らないよ。ねえ、空子」 「そうだよ。海子」

「もう説得者はいないみたいだ」

「それじゃあ、あたしたち二人が、壇上から、迎えに来ない親を説得するよ」

「それいいかも」

十五 放水始め

「よし、放水始めろ」

隊長の指示が飛ぶ。

「放水、始めろだって」「放水するの？」

「放水、大丈夫？」「いいよ。上司がいいんだって、いうから」

「相手は、民間人だよ」「あいつら、当分、風呂に入っていないだろ？」

「シャワー代わりかよ」「それなら、罪悪感はないな」

「そう、みんなのためだから」「みんなって、誰だ」

「国民だ」「あいつら国民じゃないの？」

「独立しているそうだよ」「じゃあ、放水は侵略行為じゃないの」

「日本の国は、独立を認めていないよ」「じゃあ、日本国民だ」

「矛盾するね」

命令の内容が、伝言ゲームのように変形して伝わって行くが、最終的には命令が実行された。

「放水」

交差点の四か所の消火栓から、七人と一匹を取り囲むようにして、放水が始まった。

「ひゃっほー」「気持ちいい」

「水着でも持ってきたらよかったわ」「今年の水着？」

「まだ、買ってないわ」「いやに余裕だね」

「人生、楽しまないと」「楽しませすぎだ」

「もうだめだわ。いくら喉が乾いていても、こんなに水は飲めないわ」

「もったいない。このT市は、毎年、水不足で困っているんだろ」

「いやあ、十日ぶりの風呂だ。気持ちがいい。誰かシャンプー持っていないかな？」

「やめて。あんた臭いと思っていたわ。加齢臭だけじゃなかったんだ」

「うん、なかなか、エコ的な意見だ」

「ついでに、ワンちゃんも洗ってもらえば」

「ワン、ワン」コロが喜んでいる。

「おっ、犬が立ち上がったぞ。前足を搔いている。水泳の準備運動だ」

「コロだよ。コロ。名前を呼んでやってくれ」

「ちきしょう。水攻めだって。同じT松という地名がつくからといって、豊臣秀吉の真似をしなくてもいいだろう」

「おっと、さすが、課長さん。歴男じゃない」

「豊臣秀吉って、誰？」「中学で習ったろ。義務教育の常識だぞ」

「小学生だって知ってるぞ」

「知ってても、この水攻めを防げなかったんでしょ。役に立たないのなら、同じじゃない」

「無駄な知識ばかりため込んで、喜んでいるのね」「大人の余裕だ」

最初、余裕の七人と一匹であったが、五分も放水が続くと、
「もう、やめて欲しいね」
「体の垢がすっかり、落ちた。今度は、脂分まで落ちていく」
「いやあん。足元が真っ黒じゃない。垢って、赤じゃないのね」
「交差点の信号は全て赤だよ」「通行止めだからね」
「おい、旗が倒れそうだ」「あたしたちの象徴」
「俺らの生きる目標」「とりあえずの団結の絆」
「もう、だめだ。耐えきれない」「お前、若いんだろ。もっと、頑張れ」
「頑張った結果が、ホームレスの人生か」
「仲間割れはよせ。とにかく、この旗だけは守ろう」

七人と一匹全員が放水車に背を向け、肩を組んで円陣を作り、旗を守っている。

機動隊側では、

「あいつら、しぶといね」「ほんと、一体、何を守っているんだ」
「この国に、このK県に、このT市に、守るべきものはあるのかなあ」
「自尊心?」「そう、自尊心」
「でも、すぐに、崩れるだろ?」
「一人ならばね。だから、ああして、みんなで守っているんだろう」

七人側では。

「あいつら、しつこいね、俺たちに恨みでもあるの?」
「ふらふらしても生きていることに、無性に、腹が立つんじゃないの」
「どうして?」「自分もふらふらしたいからだよ。うらやましいんだ」
「それじゃあ、したらいいのに」「できないから、腹が立つんだよ」
「なんか、変なの?」「アンビバレンツな心境なんだよ」
「まあ、もういいかな」海子が言った
「もう、いいよね、みんな」空子が続いた。

残りの五人と一匹が、二人を見る。

「旗を降ろそうよ」「権力に負けるのか」
「もともと勝負なんかしてないよ。マスコミが勝手に騒いだけ」
「守るべきものがあるんじゃないのか」
「守るべきものは、あたしたちそれぞれの命」と海子が呟く。
「人のいない国家なんてないよ」空子が続く。
「そうね、あたしたちひとり一人が国家」「ゲリラ国家ね」
「集まれば強いね」「集まらなくても強くないと」

「そうだ」七人がお互いに顔を見合わせた。コロも「ワン」と泣く。

突然、辺りがまっ黒くなった。空を見上げる。東の空、西の空は明るい。青空だ。なのに、この交差点の真上だけに雲が集結している。

「変ね。この上だけだよ」「向こうは、晴れているよ」

「天気雨かな?」「天気予報は?」

「ワンセグでは、晴マークだよ」「まさか、空の上でも、スクランブル?」

突如、豪雨が襲って来た。野次馬たちが騒ぐ。ゲリラ豪雨だ。雨粒が大きい。当たると濡れると言うよりも、痛い。雨粒に映る駅前のビル。全てを含み、全てが雨粒の中に吸い込まれている。まずは、野次馬どもが一目散に逃げ出した。ドーナツの輪がひとつ減る。

それでも、任務のために、七人を取り囲んでいる機動隊や市役所職員たち。あまりにも短時間、短分、短秒で、豪雨が降ったため、水がはけない。道路の雨水口から溢れだす。放水の水も加わり、五センチ、十センチと水かさが増す。

「放水止め」機動隊の隊長の声。

「あいつらは、どうします?」

「そんな状況じゃない。まずは、この浸水対策だ。水をくみ出すぞ」

靴が完全に浸かるほどだ。この交差点の地下には、駐車場や駐輪場がある。溢れだした水が、行き場を求めて向かう。

「大変だ」駐車場の職員が非常の早さで、非常扉を閉める。それでも、水は低きに流れ込んで行く

「全員、土のうを積み」状況は一変した。その様子を雨に打たれながらも、じっと見ている七人と一匹。

「俺たち、何もしていないよな」「何もしていないよ」

「何で、ここだけ、ゲリラ豪雨なの?」

「私たちや、機動隊、野次馬の熱気のせいじゃない」「まさか」

「棒の下から水が溢れ出ないで、空から降ってきたね」

「見えない棒が、雷様のおへそをつついたんじゃないの」

「それ面白い」「かわいいんじゃ、ないんだ」

「かわいい、からは卒業よ。これからは、面白い、か、面白くないか、だわ」

「その度ごとに、顔を化粧するの?」「そうね。まずは、心からね」

「その通り。逆境こそ、ユーモアだ。ユーモアが国境を、県境を、市境を、地境を、人境を越えるんだ」

「その向こう側は?」

「青か、黒か、白か、虹色だ」

しばらくすると、先ほどの豪雨が嘘のように雨がやんだ。雲は消え、陽が差している。だが、機動隊員たちは、浸水した地下駐車場の水をくみ上げるのに一生懸命だ。これまで、取り囲んでいた人々はいない。取り残された七人と一匹。

十六 そして誰もいなくなったけれど、いつか誰もが集まる日

「誰もいなくなったね」「俺たち七人がいる」「プラス一匹よ」

「どうする?」「どうするって」

「ここから、いつでも出ていけるよ」「交差点はガラガラだ」

「あんなに脱出したかったのに、今では自由だなんて不思議だな」

「誰もいないからね」

「元々、自由だったのかもしれないね」「自由っ何?」

「意思のこと」「石なら転がれるよ」「じゃあ、転がろう」

「まあ、俺たち、本当はここで休みたかっただけなんだろう」

「抜け出せなかったのは、嘘なの?」「それは、事実だ」

「でも、事実は時と状況によって色々変わるよ」

「今は、変わったの?」「変わったよ」

「みんな、顔がひきつっていないよ」「そうだね。顔が笑っている」

「じゃあ、解散するか」「解散しようよ。疲れたし」

「休むために留まったのに、疲れたなんて変ね」

「休み過ぎても疲れるんだ」

「じゃあ、意見は一致だ。解散だ」

「とりあえずね」「とりあえず」

「まずは、旗を降ろそうか」「そのままでいいんじゃない」

「そのままじゃまずいだろ」「誰が管理するんだ」

「杖の代わりに使うよ。洗濯物も干せるし」

「じゃあ、甲さん、よろしく」「同じく、よろしく」

「ちょっと待って。記念に砂を置くよ」

「砂を持って帰るんじゃない?」

甲がポケットから人掴みの砂を交差点の真ん中に置いた。

「何のため?」「実効支配の証拠だよ」

「難しい言葉を知っているんだね。甲さんは」「実は、高学歴なんだ」

「新聞の受け売りだよ」「マスコミも役に立つことがあるんだね」

「何でも利用しなくちゃ」「活用じゃないんだ」「そうとも言うけど」

「でも、砂じゃ、風や車のタイヤで飛んだり、豪雨で流れたりしちゃうんじゃないの?」

「飛んだ先や、流れた先に、一粒でも足場があれば立つことができるよ。足場の上に立てば独立だ」

「それいいね」「自立のための、持ち歩き足場、持ち歩き国家だ」

「今まで流れていたけれど、砂の上に立てば自立できるかな?」

「変わらないじゃないの」

「生活は変わらないけれど、気持ちは変わるよ」

「気持ちが変われば、生活も変わるんじゃないの」
「変わりたいと思えば、変わるんじゃないの」「精神論？」
「そんな難しいものじゃないよ。まあ、お守りみたいなもんだな」
「お守りか？」「守るものはないけど、守ってもらおうか」
「とりあえず、持っていたら。何か、役に立つんじゃない」
「役に立たなくてもいいよ」「期待が人間を滅ぼせる」
「あたしたち、滅んでる？」「まあ、とりあえず、生きているね」
「それじゃあ、俺ももらっておこう」「あたしも」「あたしも」
「でも、いざ自由となったら、ここから一步を踏み出すのが怖いね」
「足が震えるの？」「座りすぎたからはじゃないの」
「さっき、向かいの公衆便所まで走って行ったくせに」
「生理現象には勝てないよ」
「心のバリアフリー化だ」「もともと、障害なんてないよ」
「とにかく、ここから出よう」「もう出てるよ」
「いつかまた、会う？」「会いたい？」
「会いたくないよ」「狭いT市だ。いやでも会うよ」
「やっぱ、いやなんだ」「会うだけならいいじゃん」
「もう、孤独じゃないんだ」「そんな、大げさな」
「それじゃあ、元気で」「じゃあ、元気で」
「バイバイ、元気で」「ばあははい、元気で」「ワン、ワン」

交差点の七人と一匹は、互いに別れを告げ、それぞれ違う方向に向かって行った。

それから、数日後。いつものように朝のラッシュアワー。今日も、スクランブル交差点は、人でごったかえしている。

「痛っ」一人の若者がつまずき、倒れた。それを避ける人々。後ろからは引き続き人波だ。直ぐには起きあがれない。若者が立ちあがった時、信号は既に赤。

「ひでえなあ。冗談みたいだ」

信号待ちしていた車が動き出した。若者は、交差点の真ん中に取り残された。右足はひと粒の砂の上に立っていた。